

る、彼女も亦竟に女子なりしのみ。

頼光、頼信は、理想的大將也。

要するに此の戯曲に於ける人物は、他の史戯曲に比して、其比較的の多くの個性を含むものあることを發見すべし。

結構、主意 亦禍難鎮靖を歌ひたるもの也。將軍太郎が逆謀を骨子として寫し、其逆謀に由りて一旦源家の家門に風波を生ずるに至りたれども、遂に靜まりて全く其逆謀を破壊し了ることを叙したり。

其結構は、

第一光景、宮廷

一、頼光に勅して妖馬を鎮せしむ、妖馬は是れ將門の遺物たる繋馬の毒の所爲なりき。

第二光景、頼光館

二、頼光を賞し其二弟頼信頼平の中を擇て家督たらしむ。

第三光景、江文室相館

一、小蝶を誘つて頼信家督となる。
二、將軍太郎の妹間諜として入込し者、失戀の結果頼信及び江文の頼信の戀愛を妨げんとす。
三、將軍太郎の黨預り置きたる繋馬の毒を奪はんとす。
四、詠歌頼平と共に走る。

第二所作

第一光景、頼光館

一、伊豫の内侍頼信に嫁す。
二、小蝶殺さる。
三、將軍太郎捕へられんとして逃走る。

第二光景、市原野

一、詠歌頼平道行。
二、將軍太郎頼平を脅迫して其蘇たらしむ。
三、頼信、頼平を捕ふ。

第一光景、頼光館

一、江文室相夫妻追放せらる。
二、頼平の乳母頼平を救はんとす。

第三所作

第二光景、箕田宅

一、詠歌化粧死を待つ。
二、乳母、頼平を誑む。
三、江文の妻頼平を刺さんとする。詠歌頼平に代らんとして待つ。而して箕田二郎切らる。
四、二郎諒死、頼平悔悟。

第四所作

第一光景、頼光館

一、江文室相救されんとす。
二、頼平、將軍太郎を救ふ。

第二光景、多田の御所

一、小蝶の遺即ち蜘蛛の精伊豫内侍を惱ます。
二、頼平、將軍太郎を救ふ。

第五所作、葛城山

一、頼平頼信等、將軍太郎及び小蝶の遺即ち土蜘蛛を滅す。

一、全動作の配置 第一所作に於て、將軍太郎逆謀により間諜として入込みたる妹小蝶が、源家の家門に紛擾を惹起し、三兄弟の一人頼平を墮落せしめたることを叙し、第二所作に於て、小蝶は遂に殺されたれども、頼平は却て將軍

太郎に一味するに至りたることを叙し、第三所作に於て、頼平が乳母及び乳母の子築田の忠死により其悔悟することを叙し、第四所作に於て、頼平が一旦の誓の爲に將軍太郎に報酬すること、及び小蝶の怨鬼其戀愛の競争者たる伊豫の内侍を惱ますことを叙し、第五所作に於て將軍太郎小蝶の怨鬼實は土蜘蛛と共に滅することを叙したり。其安排轉換見るべき也。

二、部分動作の配置 第一所作は、頼光が妖馬を鎮することより、家督相續の闇探りに及び、小蝶が失戀を怒て頼平を詠歌に煤するの中央動作に進めり。

第二所作は、小蝶の殺さるゝより、頼平が將軍太郎に與せざるべからざるに至る中央動作に進めり。

第三所作は、頼平の乳母が頼平を救はんとするより、第三所作の最高動作にして兼て全曲の最高動作たる築田二郎の諫死に至れり。

第四所作は、頼平が將軍太郎を救ふより、轉じて小蝶の靈が伊豫の内侍を惱ますに進めり。

第五所作は、頼平頼信等の將軍太郎及び小蝶の靈を討滅するもの。

三、動作の統一 將軍太郎兄妹の逆謀を以て全動作を統一せり。

即ち第一所作は將軍太郎の逆謀を助くる爲に源家に在りたる彼が妹小蝶の惹起したる出來事。第二所作は小蝶の爲に墮落の道行をなしつゝありたる頼平が將軍太郎に逢て遂に反徒に與するに至りたる出來事。第三所作は頼平の悔悟。第五所作は小蝶が死後に於ける怨鬼の所爲。第五所作は彼等が逆謀の全破壊。

四、動作及び趣味の進行 此の戯曲に於ける動作及び趣味の進行は、相伴ふて將軍太郎兄妹逆謀の源家に生じたる効果として生じたる頼平の行爲を趁ふて去りたり。

第一所作の頼平詠歌が情を盗み盗まれたるより、第二所作の頼平逆に黨するに進み、更に第三所作の頼平悔悟の最高動作に達し、最高趣味に達し、是に至て兄妹の逆謀により源家に其効果を生じたる動作は其動性を收めて趣味と共に降勢を取り、第四所作頼平が將軍太郎への報酬及び小蝶の怨鬼によりて掉尾の一

動作成り、遂に第五所作の大團圓に終れり。

五、時間の配置

- 第一所作 第一光景 永延二年更衣中句 同霜月
- 第二所作 第二光景 同霜月
- 第三所作 第二光景 永延三年?月二十七日 前光景の翌月四日
- 第四所作 第二光景 ? ? ?
- 第五所作 第二光景 ? ? ?

六、場所の配置

- 第一所作 第一光景 宮廷 江文宰相館
- 第二所作 第一光景 江文宰相館
- 第三所作 第一光景 市原野(道行)
- 第四所作 第二光景 頼光館 坂田宅
- 第五所作 第二光景 多田の御所

第五所作

葛城山

其梗概

第一所作

第一光景 宮廷

七歳の幼主一條帝の宮廷、攝政東三條兼家以下公卿列坐の所に、鎮守府の將軍源頼光別勅の召に由て參内す。御供の武士には、渡邊の綱調度掛として雷上動の御弓、坂田の金時

登場者 鎮守府將軍源頼光 河内守頼信 出羽者頼平 小謀の姫 頼光の御所 坂田の金時 渡邊の綱 攝政東三條兼家 江文宰相御臺所秋の左京亮藤原保輔の子右兵衛の尉齊 對江文宰相御臺所秋の明其他

時日 永延二年更衣中句(第一光景) 同霜月(第二光景) ?(第三光景)

注意 將軍太郎の逆謀、遂に頼平を墮落せしめ、源家を滅さんとする。

箆の役、半臂に腹巻烏帽子懸し、黒漆の大太刀佩きて左右に隨がひ、障子の坐にぞ伺候ぬる。

兼家公近く召され、「召さるゝ條餘の儀にあらず。去る頃より宮中に不思議の變化、形は尋常黒の駒、刻限も午の時、いつくより來るともなく御垣のもとに顯はれ、左近右近の木の下に飛狂ひ跳ね廻り、殿上臺盤へも駈上らん勢に高嘶き、左右馬寮の官人馬部の仕丁、粗とめん繫きとめん追廻せども、眼に遮る許りにて手にとられず、有驗の高僧に仰せ大法秘法を修せらるれども、更に其しるしなし。君幼く清濁をわかたせ給はぬ慮に、不徳の御誤り有べき様なし、斯る妖怪は攝政たる兼家が責一人に歸す。諫を奉り非を改むるは君臣の常道、所存殘さず奏聞有べし。」とぞ仰せける。

頼光謹で、

怪きを見て怪まざれば怪却て破るとかや。古宇多天皇の御在位、金岡の大納言が書きたる馬、夜毎に出て萩の戸の萩を喰荒し、異國には吳道子が繪、主の僧を惱ませし類ひ、名筆名作の番圖彫刻に魂入りしたためし數を知らず。先祖經基孫王鹿を射られし武功を傳

へたる頼光、たどへ其馬生あれば迎、天威をいたしき、繪言とよばつて曇目一矢仕らば、やはか仕損じ候はん。况や神にもせよ鬼にもせよ顯す所の形は畜類、某が手をあらずに及ばず召連し二人の武士たやすく計ひ候はん。

と返答大様大鳥の、羽づくろいする綱公時、鬼でもござれ、蛇でもござれ、相手の強ひが好物珍物、いさみに勇む面魂。雲の上人力を得、此頃こはがる牛飼舎人火焚の衛士に至るまで、「誠に餅は餅屋じや。」と、宮中悦び勇みける。

* * * * *

其日も既に午の刻限、昨日の頃ぞといふ間もなく、内教坊の後より嘶き出る惡馬の相形、須彌の鬘、蹄をかくし、耳はほら貝、眼は銅鏡、鼻のあらしは海風の、千里の砂を吹立く、龍象の波を蹴立る四足の働き、惡來が多力にも止めつべうは見へざりけり。

公時いらつてふんはだかり、ひら首つかんで引寄せれば、ひらりと飛ぶを、得たりやあふと渡邊があをりずりをしかと抱く。かいくいつて駈出す。二人が懸聲、いばふる駒、牧の野取の如くなり。

頼光騒がず弓矢うつ取り大音上げ、『清和天皇四代の孫、多田の新發知滿仲が嫡子、鎮守府の將軍兼攝津の守源頼光』と三度名乗て、鏑矢取て打つがひ、よつ引き丁と放せば過たず、龍馬が三高、ずばと射口かれちめき苦み伏すと見へしが、俄に風ちち電光形も消へて失にける。

月卿雲客喝采の聲止まず。攝政殿立出給ひ、『頼光が武功今に始めず。綱金時が勇力重ねて恩賞あるべし。但し化生の出所を知らず、此事卜あるべし』と、卜の博士伴の別當を召さる。

* * * * *

伴の別當勅に應じて御階に伺公すれば、參議爲成、

化生は只今武將の矢先に鎮まつたり。此變化の本跡障碍をなすに由來あるべし。占仕れ。別當かしてまつて懷中の秘書取出し、天地に俯仰し、三才にくり合せ、暫く考へ、

ム、ウ震の卦を下にし、離の卦を上にし、噬嗑の卦と申すに當て候。易に曰く、頤の中は物あり、噬嗑せて而して后に亨ると云云。是を以て考ふれば、天下は口中。物は恐

なり。此惡を噬と一の天下の脾胃に入る時は、天晴國家の御大事。方角は御殿の辰己に一物あるべし、御詮義あれ。

と占ひける。

詞に應じ、大宮人大藏省の被官御藏をひらき尋搜せば、一合の唐櫃に頼光が放てる矢鏑くだけで篋中までこそ立たりけれ。

人々立寄り見るに唯『天慶三年三月日』と識せり。

頼光、

此書付の年號月日を考ふるに、朱雀院の御宇平親王將門が亡びし時に相當る。傳へ聞く將門が廐の邊に客星落て龍馬と成る。是我身を立べき吉相、相馬の家の軍神、馬頭大明神と尊仰し、其由緒によつて旗指物の紋所、隠れなき相馬の家の駿馬。然るに承平年中より關東にはびこり、既に王位を覆へさんとせし所、俵藤太藤原の秀郷是を誅罰し、其證に厭じたる將門が旗指物、此櫃に納りしと存するに差ふ所あるまじ。彼將門が末子成人し、密に將軍太郎良門と名のり、或は民家におし入り強盜又は山野に山だちして財寶

をうばひ、籠城の端をあらはすよし、頼光が目附の者ども告しらす。親子同氣を相求むるの奇特、將門が魂入りたる幕の紋の馬、此時を得たると覺へ候。免許を蒙むり今日より、洛中を夜廻り致させ、非常を糺し、將軍太郎が銳氣を挫しき、彌々四海太平の忠勤を抽んで奉らん。

と辯舌流るゝ水鏡、行くさき見ぬき奏せらる。

攝政殿を始めとして三公九卿八座七辨百官百寮に至るまで、『武勇明察誠に清和の嫡孫や』とあつと感ずるばかりなり。

『さへ／＼櫃をひらき證據を顯はすべし』とふたをひらけば、頼光の詞に差はぬ旗印、繫馬の幕の紋五田町が／＼に染込しは相馬の家の物領の印も見へて目醒し、猶威威の天盃、『幕旗印は江文の宰相に預け置く、家に納めて守られよ。頼光は數代の勳功國家の政道大小となく任せ仰下さるゝ。然れども未だ家督の定めなし、弟河内の守頼信三男出羽の冠者頼平二人の内御邊が心に叶ひし者家督に立て、重ねて奏聞有べし。』と氏の譽れ身の面目、世に類なき繪言に、悦びの袖を左右左の大内山にひるがへす。幕は相馬の紋

なれど、唐土までも我朝の源氏の門につなぎ馬なづく民こそゆたかなれ。

將門が繫馬の幕妖をなすことを叙し、以て將門の子將軍太郎良門が逆謀を寫す地をなす。

第二光景 頼光館

武將頼光將門が執念の變化を治め給ひしより、威勢日を追ていやまさり、御舍弟二人の内家督たるべしとの勅説、今夜その沙汰あるべしと、小寝殿の大床に入幡宮を勸請あり、白羽の矢州三筋、染羽の矢州三筋合せて六十六ヶ國の棟梁たるべき表示をしめす御注連、和光の銀燭めいめいと神慮も納受なからめや。

御臺所御座につき給へば、平井の保昌罷出で、

仰せに任せ御譜代相傳の諸武士、末武貞光を始め残らず大廣間に相詰候。但し綱公時兩人は洛中夜廻りの役人、不參に候。

と申上れば御機嫌よく、

兩人の御舍弟達とらぬ御器量、頼光の御心に何れを何れと別ちがたし。大將たる身は心

行跡天に叶ひ、士卒萬民の歸服の徳そなはらでは、家督には定めがたしとて、八幡宮を勸請し、源家由緒の諸侍をあつめ此間の火を消し、備への矢を一人に一筋づゝ、御圖として探りとらせ、一筋にても白羽多くば頼信、染羽多くば頼平との定め。闇夜のわざ私の最負偏願もならぬ筈、皆神慮の御はからひ。此御圖の矢の取さばきも、御家久しきそなた四天王の衆が承はる筈なれども、男たる身は面々の私にて、兼て矢に覺への印を付置たなど、諸武士の褒貶やかましく、こよひ此場一通りの用事はその小蝶に云付し、まづ頼信殿頼平殿八幡宮の御拜なさるゝ様に申してたも。委き事は小蝶に萬事云付し、聞合せて御家督定め首尾よいやうに頼むぞ。

と御座を立て入給へば、保昌は御兄弟の御部屋へに参りける。

小蝶が跡に一人笑み、

知れぬは人の仕合せ。頼信様に、此年月砂地の雨だれほれて、惚こんだ忍び涙。上と下との恐れを憚り、色に出す折もなかりしに、八幡様御拜に、只今是へお出。サア今宵こそ戀の花のひらけ時、頼信様に折てなりとも切つてなり共もらひましたら、ア、ぞつこん

から嬉しがるゝ忝なかる。ソリヤ忝いが御座るは。

と時めく内に頼信朝臣、装束改め床に向ひ拍手の音、高天が原に神といまります。烏帽子の殿ぶり中臣様のお聲の色どふもたまらぬ。とんと斯う抱ついてのけふか飛付て頬ずりか。チ、しんき。ちと此方向んせかし。ちよつと觸つて戴く我手。御直衣のとめぎやら、ム、ゆかしいかほりや。フン／＼ム、いとしらしい香じや、チ、しんき。なぜにやら氣がせく。顔もほかつく氣わがりもだ。退つさはつ、畏に油の若鼠、そばゆる狐腰をよぢらす、心をもぢらす亂れ足もど、けがの高名すべつた顔。凭れかゝつてひつたり抱つく。頼信驚き振返る顔と顔、なんと詞の沙もなく、

ア、ほんにわたしが様なそさうな。ひよつと滑つて抱付まし。お慮外なついで前に惚ふどした。御免なして。

と計りにて差うつむいて居たりしが、心をしづめ小聲になり。

いつぞは、密に申上たいと心に積るばかり、お顔を見れば氣おくれして、わけては如何も申されず。

といは頼信打うなづき。

ム、皆までいふな合點。我に言ひたき事ありとは此方にも覺へあり。聞は江文の宰相へ戀に出入とや。彼娘詠歌の姫と人しれず文を通はし、互の心はあひながら、頼信が此身からかろく敷も忍ばれず。姫も心遣瀧なく頼まれしは其事よな。兼々密に四天王にも云ひ聞せ、頼光御夫婦の御耳へも入置し。こよひ家督定めの品により、我妻に迎へ取べし。心せかず待れよと戀に傳へてくれ。

人も聞くかどくどからず、『萬事小蝶に任せ置く。頼む。』と云捨與にいり給ふ。

小蝶ほうとけでんして、

こりやどふじや。是程にもあてが違ふか。そも思ひ初しより御前へ出ては胸を焦し、局へありては心をくだき、一夜も安ふ寝る間もなく、幾世の心を盡せどもしやくの頼みばかり。奉公も苦にならず、人に勝れつとめ。神といは頼を立て、佛といは頼みをかけ、千筋萬筋の佛神の願ひの糸、こよひ一度にはらりつと切れ果た。エ、うらみしい詠歌の姫。常はうらなく目かけぶり、此事ばかりを隠し置て能出しぬかれた。悋氣

に位の高下はない。待て此戀を妨げ一本させて腹あせ。エ、腹が立つ。

と心の亂れ、身をけづる櫛形の戸口より、何心なく頼平君床の前に長まり、烏帽子をかたふけ禮拜の、直衣の袖そつと控へ、

時節わるい事ながら、引れぬち方に頼まれ届けぬもいかいと心もかへりみず申上ます。江文の宰相爲成卿の御娘詠歌の姫様、たんとお前を思ひこみお煩ひに成程。わたしは参る度ごとにち部屋へ召れ、小蝶たのむ、頼平様と詠歌が中の妻むかへ舟、年に一度は奢りの沙汰、せめて一代に一度の逢ふ夜を引合せてくれと御意なされ。それはく深いお心。

お情あらば私も共に。

といひもきらす。

待て。詠歌の姫は白馬の節會のお庭で見初、我も心にかくれども、兄頼信深い中と聞ものを、夫がどふも。

と報らめ給ふ御顔ばせ。

ア、その御遠慮いらぬと。尤かし頼信さま一兩度玉章は付られしが、詠歌様も心に染す。

頼信様もしかと心に取しめたとでもなし。ほんの時の一興。もし眞實ごとくなれば煤の
小蝶が一分も立ぬと。お爲あしうは致しませぬ。

と左も有つべう辯舌に云ひ廻されて頼平君、

ハテ道に違はず浮名の立ぬ事ならば、我も戀しき渡りに船。よい様に小蝶頼む。

と宣へば、小蝶が重荷片荷はありてがつくりと、氣草臥の漏刻初夜を告てぞ聞へたる。

御定めの時分よしと平井保昌、末武貞光をさきとして源家相傳の武士の中物頭分二十八人、

素袍袴の袖をつらぬ、烏帽子を並べて我もくと座につけば、上段に御臺所頼信頼平兩御

舍弟左右にならびおはします。

小蝶仰せを蒙り、

御圍の次第は各兼て承知の通り。信をこめて取給へ。サア只今火をしめす。

とさつと披いて羅の扇に撲つは秋の螢火、これは冬の夜の螢火ならぬ燈火も、消えて銀燭い
たづらに、番屏むなしく暗然たり。

人々互に辭義もなく、聲をも立ず心々に立より、神に任するめくらづかみ、行きつ戻

りつ立まふ内、渡邊の綱が從弟築田二郎纏、御圍の矢を取る床わきに座したる小蝶が衣の
そらだきなまめく薫りに心ほれ。お廣間酒の三盃きげん。覺へず寄り寄り振解けば付
寄て抱きつく。小蝶は頼信公へ他心なき氣を見せたく、左の手に烏帽子のかけ緒取てじつ
と引のばし、懐中の七首抜くより早く結び際よりずつかど切り、取てつきのけ大聲上げ。
天下大事の御家督定め、神前といひ上々の御座近く、くらまされの不行儀侍、誰かは知
らず小蝶に戯れしなだるる不義放埒の曲者。印の爲め烏帽子のかけ緒を切取たり。たつ
た今其人を顯さん。サア女中燭臺へ。

と呼ばれば、一座も『是は』と興さまし、纒、酒の酔もさめ、『なむ三寶腹きらん』と柄に手を
かけて見て、『につくい女め、差殺してやくれん。我ばかりや死なん。』と急悶れども人知ら
ず。面々烏帽子の懸緒をさぐり互の心を疑ひあふ。火を見るまでの纒が身の安否、十方に
くらむ勇猛心、やみの闇路となつたる所に、頼平君の惻隱の御心に纒がための正入幡入か
はり給ひけん、御聲たかく。

ヤア、頼平が思ふ子細あり、卒爾に燈火あぐるな。此座の諸武士一人も残らず、自

身鳥帽子の懸緒を切り、きり揃ふと一度に各聲を揃つて案内せよ。その時燈火あぐべし。

どいらち給へば違背なく面々差添の小刀ぬいておし切りく。

何れも残らず切揃ひ候。

と縦も同然に申上ぐれば、燈臺燭臺はらくく天の岩戸とひらくれど、一座の武士に疵つかぬ大將の心を頼もしき。

優閑大度の御臺所かけ緒の事は御沙汰もなく、

各取たる御圍の矢これへく。

と御意の内我もくと御前に差上る。人数二十八人、白羽の矢二十八本、染羽には一人も取り當らぬぞ不審議なる。

ひとつに取て頂戴あり、

此内に一筋も染羽のなきは頼信殿を御家督。さし次の弟御なれば世間の順道。正直の頭にやどる神慮疑ふ所なし。頼平殿は天下の後見との事ならん。自ら女的身として只今極

て云ひがたし。奏聞を経て吉日をらび目出度仰せ付られん。先々今宵の悦び、保昌末武貞光、神酒をひろめて酒宴あれ。

と頼信頼平伴ひて御籠深く入給ふ。

家督定めの席、將軍太郎の爲に間諜となりて入り居たる妹小蝶が頼信に對する失戀より、頼信頼平兄弟の間を裂んとす。及び箕田二郎頼平の意氣に感ず。

第三光景 江文宰相館

動かぬ御代のかためぞと、末をしらはの八幡山、氏子さかゆくよき光りぞとかけ頼む、世の光りぞと、頼むちやのきよのきよひよん、みてらにたつふにきよひよん、ヲ、井の澤の、さはの寒きさんやに、ていと打ならず、三がいの家とよ走りく廻る鉢こくりが、ヲ、く五郎三郎、田舎へお下りあるならば、此程のなぐり情に瓢をなりとも置いてゆけ。小ふくべをなりとも置いて行け。それはや女郎、やすき間のとなりとよ。諸國をでつるで。つでんど叩こうずるにも、瓢なふてはお笑止。極樂のホ、前にながる、涙川。如何なる淵の世になり、天地の恩、國王の恩。よしや世の中寝てか醒てか、只何事も後生なりけり。な

もふだなもだ、彌陀頼む。彌陀のちかひを頼む身の、人は雨夜の星なれや。空晴れぬ
ども西へ行く。

西の京より東の京、北は一條、南は九條、堅横九萬八千軒、足に任する坂田が夜廻り。洛
中を苦むる強盜どもを搦めんため、十徳頭巾に身をやつせば、人も空也の茶筌賣。公時が
一生に唱へ初めの南無阿彌陀佛。なもだ、の鉢叩き、思案のそこもたくらん。
ふくべのぬさへ、牙る夜の月も落くる西三條、江文の宰相爲成卿の築地より、軒を打こす細
紐に結び下し水仙一もと、行き當りびつくりし。

コリヤなんじや、厄病のまじないか。但し洛中物騒の盜賊のまじないか。疾病除のため
ならば南天と小蒜をつるはづ。ア、聞へた、御公家衆は花車、尋常くさい物はいみ物。
小蒜のかはりに葱に似た水仙じやの。さすが歌人の御見立て、何にもせい家づと。

と手をかけて引しやすれば、内に女のおとなふ聲。『これは不思議。』と又ひく綱に『あらく
く。』と返事も近づき、切戸押あけ立出る奥女中。公時をすかし見て、
戀なればこそ扮せし姿。お屋形の思はく様たんと待兼てござんする。いざお入り。

と呼ばれて公時合點ゆかず。

戀ゆへ扮すとはなんの事。瓢箪一ツの軽い世渡り。御用ならば一本が六文、青竹茶筌で
お茶ちやとたつるを召しませい。た、きの一ふし、面白いをそへまする。

と瓢箪ならばせ、『ア、殿達はじやれぶかい。隙とれば人も見る。頼みたる姫君のお疑ひも
氣のどく。憚りながらお案内。』と手を取るをふり放し、

ア、これは何とも心得ず。鍋の月代石の鬚終に見たとない君が、しなだれ給ふはうまい
と。我も岩木にあらぬども、内に残せし山の神、めつたむしやくしや悋氣するじやのち
やのきよのきよひよん。お腹たつまゝきよひよん。ヲ、こはやの、こはやく、寒きさん
やに、ていどまつちくらして、やがて迎ひにでするで、すでんと打れぬさきに、お暇申
す。

と逃行くを、走りより縋りとめ。

今宵忍ばん相圖の綱引すて歸るお心は、おせかしづりか憎てや。

と引よせてさしのどく、顔は朱ぬりの根來折敷、目玉は皿鉢。『はつ』と玉さる、『鬼か天狗か

なふ悲しや』と逃入りはたと差にけり。

坊門通りの四辻より、一文字に三星の紋も輝やく提灯二行に金棒ひかせ嚴重にくるぎやうさう。

ムウ渡邊の綱が夜廻りか。ハテ大さうな出立。一本させて笑はん。

と頭巾深く瓢箪たゝき、

大恩教主の秋の月、ねはんの雲に入るとかや。月夜に提灯ぐはいぶんじや。獨あるくはこはいなら、なもだくみだ頼め。公時頼め。

と鼻のさき瓢箪によつと突つけ、

ユリヤ渡邊これ見たか。君命を重んずる公時がやつしごと、又しては智恵なくと叱られても、出す所では智恵を出す。平親王將門が一子將軍太郎良門、山賊強盜を語らひ浴中をなやます間、片はしから引つくれと承はる兩人。綱がかま鬚、公時がいろえび色は常是がこくる同然。日本國通用のしやつら。此ごとく形をかへ、ちやのきよのきよひよんで見知らしても、どこぞが公時くさいやら盗人どもが寄付かぬ。それに引かへけ

たしましい挑灯金棒、ちんからりが面白いか。家來自慢のせんしやうならば祇園會か放生會の御こしの供せい渡邊。

とかつらくと笑ひける。

綱にすることもせず、

ホ、小智は大道の妨げ、大國を治むるは小鮒を煮るがごとく、どこ小鮒を煮るにいら火過ごせば、鱗もひれも一ツにくづれ、其魚の形を失ふ。公けの政道まづ其ごとく、其職に居て政道を取行ふ役人の心持ち、ちかふ云はれ重箱を榎木で洗ふ様にするもの。國を重箱にたとへ政道を榎木に表し、彼重箱をあらふがごとく、角々へやりといけず大様にもてなせば、器もそんなせす國全たし。是聖代の政事。愚者の政道は細かにて、角々まで洗ひといけんとするゆへ、重箱も損ね國危し。家に鼠國に盗人、百二百切りすていもつくるとなきわき物。内に仁愛を施し、外きびしく警固せば刃も用ひず徳に隨ひ、自から治まる道理。合點がいたか坂田殿。ちやのきよのきよひよんの分別、どひよんもない無分別。

と一口に打込めば、公時顔はふくらせども道理につまり返答なく、

ちんふんかんこちや知らぬ。重箱と榎木、瓢箪と茶筌と、何れものかぬ御中なれど、手柄はしがち。きひよんかどひよんか鉢叩きの仕上を見い。

とへらず口、別れてこそは……

行く水に數書ぐよりも敢果なきは、思はぬ人を思ひがは鶺鴒ならぬ翅のゆかり、小蝶を橋とふみ迷ふ出羽の冠者頼平、詠歌の姫に兼てより思ひ亂るゝばさら髪烏帽子もかたしと脱ぎすつる。姿はいかに男とは、いざしら絹を打かつき、築地のそどもに忍ばるゝ。

コレ小蝶、蝶ちの心遣ひ忍ぶ夜の案内、禮は詞につくされぬ。愈々頼む。

と宣へば、

ア、何のお禮。もと此戀は此小蝶が頼信様に底心から命かけて思ふゆへ、詠歌様と頼信様の手をきらねば私しが戀は叶はぬ。折に幸はい詠歌様も頼信様には見ぬ戀なり。餘りお心もすこまぬ所を見付て、お前の戀を取組んだ。去ながら先づ今宵の新枕は頼平と極ずども、信と平とをどちぐちに頼様〜で紛らかし、其上は尾が出よふが臍が出よふか

それからは此方の物。これ此築地が彼様の花に引かるゝ相圖の糸。

と引けば引かるゝ頼平も心はどき〜どきつきながら、出じほに出船の乗かゝり。小どかしげに腰元がこち〜と招く花すすき、花に我身をさそひ行く小蝶につれて入り給ふ。

こゝに平井の保昌が弟右京之亮藤原の保輔同く一子右兵衛の尉齊明父子共心飽まで姦凶にて、頼光に見放され、一家に背く素浪人。黨をたて衆を結び洛中に横行し、もどで入らずの切取り追討ち。刺さへ將軍太郎が幕下にしよくし、王位をうばふ大望。膽のふとき同類二十四人引具し、並木の歩みくるごとく一様のがんだう頭巾。保輔齊明を近づけ、

是ぞ江文の宰相が館、主君良門殿家の御紋、繫馬の幕印爲成が預かるよし。門一重ふみ破り奪ひ取はやすけれども、青公脚原と侮るはふかく〜。此頃巷の風説にとよせ偽り入らん。油断するな。

と門打たしき、

武將頼光朝臣より急用のお使、關貫ひらけ。

と罵詈雑言たり。館の内は寐入ばな何事やらんと騒ぐ計り。表はしきりに打たしく。門番下部

口々に、

主人爲成卿宿直の御ばんあるすく。御用あらば明日。

と聞もあへず。

イヤサ氣遣いなとでなし吉左右の御使ひ。河内の守頼信公頼光朝臣の御家督に極り、詠歌の姫を御籬中になされんとの納入。善は急げと夜中ながら、渡邊の綱頼みの宰領に参上せり。はや開かれよ。

と僞はるにぞ、愚の門番青侍ども大門ひらけばやすく保輔全類引連れ通りける。

奥へかくと告たりけん頼平はつと氣も消え入り、寝ほれ姿に立ち出る。袂をひかへ詠歌の姫。

これ申し頼信様。千束のお文は皆僞りあさい心のお歸りか。今聞く通り頼光様より、綱とやらが祝言の頼みの使にきたといな。兄親様からお免しの世間ひろい夫婦ぞや。雞がなこふが日が出やうが戻しはやらじ。

と引とめられて出羽の冠者、

その祝言のお使ひが咽につまる。今は何をかくさん我は頼信にあらず弟出羽の冠者頼平。兄の戀路を知りながら切なき戀は我れ計りか、それなる小蝶も頼信に思ひは同じ思ひより、僞はり枕をかはせしに、存じよらぬ祝言の納入れ。宰相殿御夫婦、お請われは密夫全然。兄嫁水におぼる時手をもつてせざるの理に逆ひ、親兄の禮を亂る。頼平は心からとも断念んが、貞女の道を背かせし口惜まよ。

と計りたてどうと坐して涙ぐむ。

詠歌の姫も呆れはて誓し詞もなかりしが、

ハテなんどせふ。寝てしまふての悔みといふて返らぬ。一ト度けかれし此身なれば頼信様に添ふ氣はない。あの使の歸らぬ内こゝを連れてのき給は、不義の名も立まじ。取違へてもかはつても殿御ひとり添ひ通すが女の道。一夜の逢瀬に父母と思ひかゆる目ら、見捨てたまうな頼平様。と抱きつき、割なき中とぞ成り給ふ。

チ、できた〜詠歌様、兩御所の首尾は小蝶が受取た。跡に心を残さずとも連れましては

やあ退き。夜明くるまでは御供せん。はや／＼お出で。

と引立られ、いづくを當てに頼平公詠歌の前に薄衣させ、落行く先のうき身より跡の辛酸やまざるらん。

門内俄にさはがしく雨戸障子切りさく音。叫びわな／＼女の聲々。「ヤレ盗人よ押入りよ」と言ひ甲斐なき下部共、小鬘をはづられ、真向われ、下女も仕丁も朱にそみ命から／＼逃て行く。

爲成卿の御臺所萩の對甲斐／＼敷く繫馬の幕右手にかい込み抜刀、保輔がたゝむ太刀受けながしく門外へのがれ出で、切りはらひ飛しさり。

ヤア世の常の強盜にあらず。金銀衣服に目はかけず、天子より預かりたる此幕望むは曲者。呼吸の通ふ其うちはいつかかな渡さん。長袖の女房とあなづり、近ふよつて怪我するな。

と殊勝には宣へども、詠歌の姫はいづくぞと一筋ならぬ胸の内、落もやらす支へらる。

ヤア娑婆に飽いたかめろうめ。その幕こつちへ渡さぬか。

と又打かくるを切りほとき、戦ふ後ろに、齊明つゝと駈寄り、萩のたいの太刀打落し取てひつふせ捨つくれば、保輔陣幕ひつたくり押戴き、

本望／＼。そいつ刻め。

と云ひすて、門内へ駈入れれば、鬚引上げかき首せんと刀逆手に取る所へ、東西より綱公時陰陽の龍の雲を下る威勢一さんに駈來り、公時すかさず齊明をもんどり打せ踏みつければ、綱は御臺の塵うち除ひいたはり忍ばせ奉る。

公時ふまへし腮張上げ、

ヤア保昌が甥の殿ならず者の齊明か。保昌が度々の療治でなをらぬ盗人病、公時が細工あんま十四經、ちつと痛いを堪忍せい。

と首ぐつと引ぬき、渡邊諸共大音上げ、

天命しらぬ國賊めら、速かに非を改め降参すれば命を助くる。こはばらば手本は是れと内へ投入れちやうど睨みし眼力は、尺餘の築地も見ぬくべし。

保輔門の屋根につゝ立ち、

ユリヤ此幕をひるがへし、將軍太郎殿を位に即け、關白になる某。降參せいと舌ながし。高位につかふ詞をしらぬ慮外者め。

と口に任する存外雜言。

ヲ、結構なる關白職。座の高いが望みならばまつかせ。

と綱公時ついでより、扉關貫かためたる左右の柱に立別れむんずと握り、「ヤアうん」と力に任せ押上ぐれば、さしも堅くぬりかためし築地四五尺くづれ落ち、門はねんなふ大地を放れ、二人がせだけ指上ぐれば、保輔とぶにも下は遙か、棟瓦にしがみ付き大聲上げ、

申し綱様、高位高座も高過ぎて目がまふ。幕指物も是れかやす、命助けて公時様。おじひ。

と男なき涙しぶきの瓦ぶき雨やさめく見ぐるしき。

綱公時どつと笑ひ、

ヤイ保輔の安やぬふき、漏らぬ様にぶきおれ。

と彼方へ持行きこなたへゆすり、思ふほど苦痛させ、柱を左右へ引はなせば、門桁かうり

やうかへるまた、桁うら板土瓦ぐはらくどうと地に落つる。保輔がてつへい背ぼね、二本の柱に打みしやがれ瓦礫と散つて失にける。

性こりもなき殘黨原一度にむらがり来る所を引きよせく首すつほり。踏つけてはほんど抜き。南方毛貫釘貫まさりの二人が手さきひとりも漏さぬ抜き首は、鬼火ほるより安かりける。

公時首を門柱にくくりつけ打かたけ、「きよひよんどひよんのおさめの拍子よひは瓢箪、曉はうち取るわたまの鉢叩き、渡邊殿。」とはやすれば、綱も拍子にのりの道、「大恩教主の釋迦だにも、涅槃の雲に入り給ふ、いはんや怨敵朝敵をなとか一人ものがすべき。なもだく只頼め。主君の智徳に我々が武徳もまさる源氏の御代。たどひ朝敵將軍太郎、水練飛行の鱗翼を得たるども、水に入らば水をわけ、雲に入らば雲をさき、討取る印は此幕の馬を味方に繋がる。綱公時か猛勇力、四天王の巻頭巻軸、末世の筆にとめける。

小蝶僞て江文宰相の女詠歌姫を頼平に媒す。將軍太郎の黨繫馬の幕を奪はんと欲して江文の館を襲ふ。

第二所作

登場者 出羽の冠者頼平
小蝶 河内守頼信
渡邊の綱 頼平の御臺所
其他 將軍太郎良門
頼平の御臺所

時 日 ？(第一光景) ？(第二光景)
 注意 小蝶の怨死、及び頼平惡に惹かれて捕はるることを寫す。

第一光景 頼光館

都の富士を動かさず、こゝに引よせ目がりの、里の賤屋も植込の、木の間に見せて山水の、唐繪を庭に寫し取る、とんだ物ずき飛石の、石は白河かも川を筧に取りし手水鉢。乾の御殿は頼信公まだ獨り寝の御部屋作り。今宵俄かの御客とて座敷くのはき掃除。女子手わざのはかどらぬ、上段書院かこひの間、床は寢覺めが生花の、長押鴨居を拭き立つる。

更級杉野が障子のほこり鳥ぼうき、柄さしぼうきの差出口、

晩のお客はどなたやら、めつたに目出度くの譯を知らねば悦こばれぬ。寢覺どの様子は聞ずか。

ム、こなたは未だ知らずか。お客と云ふは此お館の嫁君。その譯はの、兼々頼信様戀こがれ給ふ詠歌の前、いかに戀なればとて有ることか、弟御の頼平さまが盗み出し、お二人づれでお館を欠落ち。行きがた知れぬ騒動。浴中は是さた。院の御所様殿聞に達し、伊豫の内侍様とて詠歌様におとらぬ美人、頼信が宿の妻にせよとの院宣。今夜にはかにお輿が入る筈。是と云ふも大殿頼光様の御威勢、頼信様のお勤めのよいから目出たい御祝言ではないかいの。明日はお臺所のおもつき。今宵はお寢間でしつほりとお二人のおもつき。ア、羨ましの伊豫の内侍様。彌々いよのふへうたんじや。サアさいとぞとく、おつき。

と打笑へば、更級がいき過ぎがほ、

上々はじんじやうでお獨りの杵でもつの子餅が出来れども、こちとが日は下用に遣ふ味増まめ白。

どなまめき笑ふ女郎花、あなかしがまし口がまし。

それはそふど此小てふは今朝からこいへ顔出しせぬ横着者、小蝶く。

と叫ばられ、蝶はかはいや白粉を泣はがしたるやつれ顔。頼信の御祝言胸にせまれば氣も
うかず。返事なくく立出れば。

是こいな人出来るぞや。上から下まで目出度と。猫の手もかりたい忙がしと。そ
の泣顔はなんぞ氣色でもわるいか。御新造のお部屋の掃除あるそかに致すなどお局の云
付け。人にはばかり骨おらせ、ぬつくりと影はひりか。アレ西山に日もちりく、お輿の
入るに間も有まい。こちとらが請をつた座敷廻りの掃除は仕舞。そなたの役はお庭の植
込み、蜘蛛の巢取つて落葉はいて水打つて、そしてからのらかはきや。

と叱らるゝ身もしかる身も私しならぬ宮仕へ。心に任かせぬうきふしの竹竿取つて庭にあ
り、蜘蛛の巢取るやどりませし思ひはつらき頼信君、外の女に添はせじと心一ツ身一ツの、
胸に網はるゝ蟹の相々に糸引で、八ッ手に蜘蛛のねや作り。寢覺が見付け。

それく小蝶殿、それ見さしやれ。チ、恐ろしい大きな青蜘蛛、人の口へ入れれば、其まゝ、

死ぬる大毒虫。嫁君のお部屋さき御膳廻りへ落ち入るまい物でもない。早う取つて捨さ
つしやれ。

と云ふに小てふが心付き、

ア、ほんに唇へさはれば人を殺す大毒、扱もなりに似せぬこはい物。

と口には恐れ心には、此蜘蛛取て内侍にあたへ、我戀の仇とらん物と一念きとす執着心、蜘蛛の毒よりすすまじ。

おくに、局の聲高く、

あれく、表御門より先走りの御案内。伊豫の内侍さま今も入り。お迎ひの手燭座敷の
蠲臺作法が大事。女房達袴に髪さげて皆おじや。

と叫ぶ聲に、「アイくく」とさめめき賑ひ入りけり。

跡には小蝶よき隙ぞと足をつまんで手を延し、巢をはたと打拂へば、いと果敢なくも落ち
くる蜘蛛、服紗におさへ押包み。いたゞきく天に捧げ呪咀の詞、「抑汝が神通不思議人力
も及ばず。野馬臺とやらん唐土の書に糸を引いて文字を導き、日本の名譽をあらはし蜘蛛

かゝつて悦び來ると云ふ本文も有りと聞く。又人の命を取ること鳩毒蠱毒より速かにて、善惡に渡り妙を得たる精靈。寸にたらぬ汝が形に我四尺の魂をしつかと受とめ、伊豫の内待を今宵の内に毒害し、戀わぶる頼信公と此小蝶が縁の糸を、結び合せて玉津島、神詠の驗を見せよ。急々如律令。』と懷中にかくし入れ、小襦ほら／＼歩み行く。外面如菩薩、内心如夜刃、表面にみへぬかは一重。

障子の彼方さいめき渡り、嫁君のはやち入りと數々祝ふ銚子鳴臺、松と竹との千代かけて、千秋萬歳のちはこの玉とぞ謠ひける。

世にうたひしも一昔し、先年相州猿股の城にて朝敵となり、亡びたる相馬二郎將門が遺腹子の嫡子將軍太郎良門とて兇猛強氣の不敵者、父がむほんの緒を繼ぎ、天下を覆へさん計略。同腹の妹の氏素生をかくし、小蝶と名づけ頼光の奥方に奉公させ、館の様を聞合す便りも細き筧の竹駒の頭を兄妹が心通ずるさ／＼やき竹。館になれて水上のかはら面に徘徊し、妹に知らせの短角出し、高音をそらして吹く笛の音もふけ渡る御館の内、小蝶は兼てしめし置く兄良門の相圖の笛、心にこたへ忍び出れば、筧の水も人もたへたる離れ庭、と

み口に口さし寄せ、

兄様良門様お出でなされたか。

と吹きこむ息は竹の筒ぬけ、聞取る兄は遙かのかはら。妹小蝶は館の内。耳と口とは隔たれど、間の筧は詞のかけはし、側でさ／＼やくこぞくなり。

良門竹に口をよせ、

ヨリヤ妹。頼光の四天王のと鬼神のごとくいはるれど表裡を知らぬ一圖の大將。某足元にあるとも知らず手遠き所を尋さがし、館には手に立つ武士一人もなしと聞く。これ本望の時節到來。しかも今宵は頼信の婚禮。上下の武士ども酒に酔ひふし油断は必定。此處に乗て忍び入り、頼光頼信安々と討取り、帝を追ひこめ王位をうばひ、父が素懷を達せんは此時。案内はよく知りつらん手引せよ妹。

と語れば、此方はとむねつき、兄妹心を合せ置いたくみの筋もあた花の色に引かる。小蝶が心。頼信君を今更に討すもつらし引かれもせず。返事に迷ふ戀慕のやみ。空さ／＼くらき黒書院、廣椽の下身をひそめ、傳ひよるは頼光の御臺所、小蝶がそぶり心得ず窺ひ付けよ

り給ふとも、知らぬ因果のさしやき竹、

ナフ兄様、いまだ館も鏡まらず仕損じては一大事。今夜に限るとでもなし。必ずせくま

い。

と一寸通れに期をのばせば。

ひきやう千萬おくれたか。是非今宵はのばされず。性根をすよ妹。

と漏るゝ五音に、北の方守り刀を抜くより早く飛びかゝつて小蝶が肩先一打に、斬られてうんと反返へり、

何者なれば何の意恨、望みある大事の命、助けてたべ。

と逃行したる手にまどひ、取つて引き寄せ、又一刀指れてあつと叫ぶ聲。何とやらんと平井の保昌、指燭かゝげちどり出で、是はと驚く小蝶が深手。外にはしらぬ將軍太郎竹の口に耳はなさず、妹が返答今や〜と一時餘り、待ちこたへたる堪忍情。さすか武將の北のかた色もかはらず小蝶をかばと突きのけ、

こゝにつくの女め。これ保昌、今宵まふけの嫁君伊豫の内侍の櫻の膳に蜘蛛を入れ毒害の

工み、配膳給事は此小蝶。子細こそあらんとつけて来るあのやり水筒の外に全類ありと覺へたり。疑ひもなき盗賊の引入れ。ユリヤ陳じても免れぬ命、包まず云へ。

と攻給へば、小蝶苦しき目をひらき、

盗賊の手引とは恨めしい御臺所。身を入つたまに刻まれても白状する身の上にはあらぬとも、盗賊の名を受けては先祖の恥辱。兄弟一家の名おれ語つて死ぬる。事もあらかや平親王將門が娘、將軍太郎が妹は自ら。父が仇を報せんため間者となつて宮仕へ。狙ひくらしし此年月。ア、果敢なき女心、頼信の御器量にほだされ、大事は忘れ戀一ト筋、外の女に添はせじと、詠歌の前頼平殿我媒ちにて都をとおし一人の邪魔は拂ひしに、院宣にて伊豫の内侍の祝言、重ねくの戀の邪魔、毒害して妬みをはらさんと思ふ内侍はつゝがなく、却つて我身を失ふは、戀ゆへ先祖の仇を忘れし親の罰兄の罰、當らばあたれ、殺さば殺せ。生れかわり死にかわり頼信と内侍の中、一念の鐵石七重八重の隔だてとなり、思ふ儘には添はせじ。

と夕闇てらす眼は明星、顔色おけに髪さかだち、狂ひのしり奥を目かけて飛びこむ所、

保昌ほうちやうすばと抜打ぬきうちに丁ていときつたる拳こぶしのかため、首くびは飛とんでわななき最期さいご。女めものがれぬ朝敵あその末すえ、天罰てんばつ神罰しんばつまの前まへなり。

北きたの御方ごほう身をふるはし。

内うちに入い込む奸人けんじん、おのれと名乗なをり自滅じめつするも神明しんめいの加護かご當家たうけの武運ぶうん長久ちやうきうのしるし。さす敵てきは將軍しやうじゆん太郎たうらう。自みづかが術てにてたつた今いま釣つよせん。組手くみてを用意よういしからめられよ保昌ほうちやう。

と笥こしの竹たけに口くちさし寄せ、

これ兄あに様館やうかんの内うちも寝ねしづまり、大酒だいしゆにて正躰せいとくなし。前裁ぜんさいの外ほかがこひ塀べいの切戸きりこを明置あきいたり、究竟くわいけいの時節ときせふ、サア今々いまいま。

と宣のたまへば妹いもうとと心こころへ將軍しやうじゆん太郎たうらう、

でかしたくまつかせ其處そのところへ。

と云いひかへす、聲こゑに保昌ほうちやう北きたの方ほう示し合あはせて鈎かぎ鉄てつあけ、鎖くわきあふて入り給たまふ。

良門りやうもん妹いもうとが教しゆへの如ごとく外塀げがい近く走はしりつき、内うちの様躰やうとく聞きみ立てし、切戸きりこを押おせばきりりと開ひらく。「仕濟しせいしたり」と獨笑どくせうみ、入い込む庭にわの勝手かたては知らず。立木たちぎも人ひとかと心こころをくばる暗くらき夜よ

の、御殿ごてんの火影かげを目めみてにて、泉水すゐ築山きよやま切所きりところをこへ寝所ねところ間ま近く窺のぞひよる。

保昌ほうちやう女の衣え打うちかづき、味方あじかたの組手くみてに相圖あひあを取とつて出でて向むかへば、近々ちかぢかと寄よつて小聲こゑになり、

小蝶こてつが神妙しんめうの働き、親兄おやしやうへの孝行かうかう此こゝの上うへなし。頼信らいたうの寝所ねところはこれか。頼光らいたうはいづくに有あるぞ。サア案内案内へ。

と立寄たてよる所ところを衣えぬぎすて、良門りやうもんが弱腰じやくこしつかと抱かかく。
ちつとも動うごせず

ホ、ッ片腹かたはらいたし。日本にっぽん無双むさうの功こうの者もの將軍しやうじゆん太郎たうらうをたばかつて、組くみみとめんとは姿すがたに似にぬ不敵ふてき者もの。四天王しやうてんわうは他行たかう。平井へいゐの保昌ほうちやうと云いふ木葉こは武士ぶしよな。云いはれぬ事ことに腕筋うでぢんねぢられ、あら肝かんとばして恨うらむるな。

と振りほどく大力たうりき。

ヤア忤うめ、咽のどの穴あなの廣ひろ過ぎたる廣言ひろご。云いふ通り平井へいゐの保昌ほうちやう、出でわふ儂なまが運うんのつき、動うごかれば動うごいて見みよ。きうん。

と締付しめてけて猶放なほはなさず。投げられてもひるまぬ力牛角ちからうしかくのあら武者むしゃ、上うへになり下したになり人ませ

もせず揉合ひしが、保昌が弓手の足松の古根に踏みくじけ、立ちなぢらんくとする隙に腕もぎ放しとんで行く。

向ふは粗子の高提灯、歸れば捕手のふり松明、前後をつゝむ火の光り、遁るゝ方なき死物狂ひ。五人六人一ト掴み、豆まくごとく打付けられ四方へばつと逃ちつて、恐れて近づく者もなし。『よし今宵は是まで』ともと來し道に引かへし立歸る。

待まうけたる保昌岩影にぬはれ伏して遣過せし、横になぐる切先、將軍太郎が脇腹をかゝれひるめば、得たりと太刀投捨て、乗つかゝり腕捻まはし、『強敵を生捕つたり折合へやつ』と呼ばはたり。

あら不思議や小蝶が死骸、しうねき一身骸に觸腰よるぞと見へしが、生るがごとき形となつてむつくと起き、保昌が襟ぎはつかんで引きのくる。妄執幽魂の神通力、五躰を縛られ惱む間に、命みやうがの將軍太郎、虎の尾をふみ毒蛇の口はうく通れて失てけり。

『ヤア大事の敵をのがしたか、かたふ人は何奴。』と振り返れば小蝶が屍。さしもの保昌ぞつとして指折り放し突きのかれば、五輪の石の轉ぶがごとく首と體は引きわかれ、くはら

くどつと天地にひらく愛着心、妬女の性根ぞ恐ろしき。

此ま、置かば又此上如何なる仇をかなすべきと、ずた／＼に切り亂し、

サア遠くは行かじ將軍太郎追つかけて討とめん。者共來れ。

と勇みをなし、振りたて行くや松明に、明行く星の光りをうばひ跡をしたふて去る。

小蝶嫉妬の爲に、殺さるゝに至る。

第二光景 市原野(詠歌の前道行)

武士の弓胡録はあひもせで、戀のちも荷によりひらの、肩背いとはぬ詠歌の前、思ふに逢はで思はぬが、情をぬすみ盜まれて、ぬれより濡るゝ雪のかさ。心かはるゝ變らじと、浮れ出づるぞたいならぬ。

空は雪げに鞍馬口、ちた一口に加茂山の、神さへなりて雨ふりし昔男のわくた川。散りもいとほ露の身を、草にあくてふしら玉か。問へど答へず消えもせず。見あぐる顔も見あはずも、ひとの思ひにしんきやと、いつそあろして石道を、歩むもほんに玉くしげ、二人つれたる衣手の、袖から袖へ手を入れて、すぐに比翼のとりなりを、盡きぬ契りとかげう

つす、我みどろいけぞつとして、まだ日數へぬ旅さへも、思ひやつれのしどもなや。
 あれ／＼峰に打なびき、雪にあらひつ風に又、けづりかけにし青柳の、手ふれぬ髪も我が
 みも、いつ取り上げていはくらや。われて逢ふ夜のきぬ／＼に、あけの睦言今更に、うし
 や別れは袖の海、馴染ぬ昔まじじやもの。幾夜かさねし情のすへも、恨みこがる、身は戀
 衣、せめて一夜はアきても見よかしな。泊り定めぬ旅なれば、いささて誰か松がさき。さきで
 添ふやら添はぬやら、知れぬ此身とわびぬれば、今はた枝になにはなる、なんのその／＼身
 をつくし、戀の瀬ぶみの一としほを、からくも染めて入しほのおか、山もあらはに木の葉ぶ
 り。残る松さへほそ／＼と、曉つぐる鐘の音に、まだき鳥の寢所を、立行く數も三四二又
 三五つ六の花。其花の頃いつ又みぶの花盛り。みぶのお寺の社殿で、／＼／＼、花の
 盛も人の盛も夢の夜嵐。社殿／＼／＼。君ならずして誰と又、世に立榮へ、ほこ
 るだ村。三せを掛て二のせ村。此方につ／＼普陀落寺。道行く振りにとどひて、百夜もあ
 なじつれなさの、小町が名のみ古つかを、小野とは云ひて薄ちる市原野にこそつき給ふ。
 頼平そげ立つ顔ふりわけ、

なふ詠歌の姫。玉だれ几帳の外見ずが戀なればこそ、雪霜の寒い冷たい勞れもいとほぬ
 歩はだし。心中と云ひ姿と云ひ、兄頼信の打こまれたも道理／＼。小蝶が御影蒙らずば
 今頃は兄の奥様。ひつくり返つてついで弟嫁。念力の矢に當つたからくりのじや。
 と跡先ふまへぬ戀の道。詠歌の姫もどはうにくれ、

世の中の不思議とて是程不思議の縁もなし。おの様と夫婦とは、結ぶの神のよもや粗相
 もなされまじ。前生の因縁か火の中水の底土灰と成るまでも添ひ果るが女の操、憂目つ
 らきめ覺悟のまへ。わたしが事を苦になされず、世間廣ふ、源の頼平と御身を立て下さ
 んせ。女一人の身をかばひ、お名ばし汚して下さんすな。

と打涙ぐみ宣へば、

チ、我もさは思へども指當るあてもなし。鞍馬山の別當は祈念をさせし好もあり、押付
 け頼む心にて、爰迄は來りしが、山中で雪に逢は、難儀至極、今少し是で見合さん。エ
 、口惜い此有さま。冬田に残る鳥おとし、是を心の屏風几帳と思ふてたも。
 と打かけ給ふ男なき。

いや我よりも大事の御身。

と又うち着する袖と袖、顔を見合せ泣きしつむ、涙こぼりておどし原、野邊の霞と亂れけり。

冬の日あしの晝も過ぎ、八瀬へ別る、小道より小山の様な男共六七人、手々に背負ふ萬籠はんがい、錢箱櫛箱鏡建、たち刀鎗長刀も、一つに付けたる牛の鞍、のつさくと近付くは、代官の宿が、か旅芝居かと疑はる。

曲者ども立ち留り頷き叫やき荷をよろし、夫婦の傍へのめり寄り。

コレ女郎さん美事です。たまりませぬ。

と帯際へずつと遣る手を敲きのけ、

なめ過ぎたいやらし。

と頼平に寄り添へば、

エ、ぐはちな、言はひでも知れたと。なんぼ美しうても器量に惚るこちとではごめらぬ。その結構な衣服に首だけ。斯ふくとき掛つてからは否でも應でも帯をかす。*、*、若

い人、あつたら前髪はやい落花。ハテ美麗な腰のまはり、衆道女道どちらも好物。一刀しやつふり言はせば着物の直打がない。美しづくで裸になりや。目に角立て酷いとも、此様に笑ひく云ふも剃所は同じと。二つ取りには痛いめせぬが其方の徳。ナア皆の者そふじやないか。なまみだ佛。

と詞できよくり、頼平とはしら波の直下に見るぞはまり成る。

山賊共山立共聞きも知らぬ詠歌の姫、魂もきま〜。コレ申し大事のお身、必ず短氣出し給ふな。』とよろ〜顔のふるひ聲。

ハテ彼奴ら不情に何の短氣。望みをかくる腰の物、呉れるからは別義ない。サア受とれ、と抜く間も見せず、さきに立つたる鬚男大げさに打て打はなす。

ヤア侮つて先をとられた刻めよはたけ。

と聲々に抜きつれ切り結ぶ。烏獲が腕さき、孫吳が術、兼備へたる血氣の勇者、弓手右手へ切りはらへば、命を惜まぬ強盗ども、手痛くひしがれ引色に見へたる所に、張本とちほしき大の男眸の蔭よりぬつと出で、詠歌の前をひつ掴み。

ユリヤ若者。こはばらば此女、一刀ぎやつと云はする。
と切先胸に押あつる。

ア、是々聊爾せまい。氏系圖國郡にかへたる女房。粗忽するな早まるな。手向ひせぬ。
と刀投捨て給へども、氣もゆるされず手出しもならず。一生一世の進退浮沈、心をこがす
頼のけふり、氣をあせる汗の玉水五躰をひたすぞ道理なる。

張本くはん／＼と打うなづき。

今の働き、劍術稽古の手練ばかりにあらず。天骨自然の妙處感じ入る。眼中面色葉武者
にあらぬ見所あり。我とても渡世計りの強盗ならず。御邊が如き武勇の達人を試み、味
方に頼み招かん爲め。斯く云ふは平親王將門が一子將軍太郎良門。父が鬱憤を晴らし、
世を覆へさんと思ひ立ち、妹小蝶を頼光が館へ忍び入れ置き、内通せしに願はれてあ
なく討せ、無念いやましの骨に徹す。我に頼まれくれまいか。此女の一命は御邊が返答。
いやかちふかの間に有り。

と人質取りし手詰の詞。頼平はつと顔色變じ惘れ果て見へけるが、

扱は小蝶は妹、御邊は音に聞こし朝敵の張本平親王將門の一子將軍太郎よな、ハ、ウ、
其女も遊君妓女の賤しき類ひにあらず、江女の宰相爲成卿の息女詠歌の姫。その姫と語
らひしも小蝶が情の媒ち。我こそ多田の滿仲が三男出羽の冠者頼平。兄頼信その姫に心
を懸られしも憚からず馴染め、微服潜行の欠落者とは成つたれども、御邊が如き朝敵に
出で合ひ首取つて、それを眉目として兄頼光頼信の心をやはらげ、二度館へ立歸らんと
欲する所、大船を飲む鯨鮫も、鐵の索網にかこまれし。エ、無念口惜や。

と大地をたゞき足ずりし踏みくだく霜柱、百千本の劍の山微塵にちる、計りなり。

ア、これ頼平様狂亂かうろたへてか。天道に背き朝敵に與し、身も家も立つ物か。女一
人をかばふても名を汚して下さんすなと今申せしはこの事。短い契りと斷念め、此ま
我を見殺し。此將軍太郎が首取つて高名遊ばせ。一味などなされては、必ず未練御ひ
けう。

と身をもたへ、心ばかりを咳上げて叫び給へど動かせず。

サア頼平、一味か但し女を殺すか、返答おそくて見苦し。いかに〜。

と詰めかくる。

エ、是非もなし、源の頼平がたどへ朝敵と成り、一生を捨てばとて、召つれし女をむさく殺させ、我一人の耻辱ならず、先祖六孫王迄源家の氏の穢れ。サア今日より骨肉親類の好情を振捨て、遠變なき一味ぞ。

と皆迄言はず打消しく、

物がついたか、天魔の見入りか、頼平様。

と叫び給ふを、『息立つるな』と袂を口に押込み、良門大きに悦び、

さすが源の頼平、果敢の思ひ切り即座の一味、亡父將門冥途の大慶これに過ぎず。上臈、左こそ苦からんとつき放せども正躰なく、伏し沈みてぞおはします。

ナア頼平。足下は清和の庶流桃園親王の苗裔。我は桓武の正統葛原親王の後胤。王孫さらば遠からず。王位を望むに憚りなし。運に任せて義兵を擧げん契約の盃。銚子これに。

と牛引きよせ、指添へ抜いて耳ぎはずんどひつ薙ぎ、生血を合子に絞り受け、

是こそ唐土春秋の會盟、牛の血をすゝつて金鐐の契ひの法。我朝の起請神水同然かため

の盃。年かさに良門より。

とずんと干して、頼平の前に合子を指寄すれば、推戴きずつと干し、

歎血の義を結ぶ上は盡未來變せぬ魂。千騎萬騎と思し召せ。はやく思ひ立ち給へ。

と跡先ふまへぬ若氣の契約。聞くも悲しき詠歌の前、

是なふく大將の一言は善惡の堺いぞや。

と止めても押へても聞き入れなければ詮方なき、染てかへらぬ墨子が白糸、もつれの末こそうたてけれ。

良門が物見の鬼同丸あはたぬ敷立ち歸り、

源の頼信宿願のため鞍馬詣で、歸るさは此の道と承り候。

と大息ついで言上す。

將軍太郎すくく踊り、

サアしてやつた妹が仇、彼奴を討取る軍神の血祭り。なんと頼平不同心か。

ヤア只今の契ひの上は尋ねに及ばず。一味始めの證、兄頼信が初太刀を仰せ付られか

し。

ヲ、ウ満足く。コリヤ鬼同丸、此牛を屠り腹の中に深く忍び、野飼の牛の死たる跡に見せ頼信を欺き、一太刀刺せ。

と念比に云ひ合め、頼平伴ひ阻蔭に忍ひ待つとも白雪に、源の頼信朝臣手廻り少々御供の、中にも一人當千の渡邊の綱直衣の下に腹巻し、せんだん藤の弓に征矢取りそへ、御馬の口に添ふたるは、さも勇々しげに頼母し。

頼信袖を打拂ひく。

面白の影色やな。年ある御代の印しには、野にも山にもつる白雪。

と古歌を吟じて行く駒の、蹄に花を踏ませては、これも惜むか初深雪、手綱をひかへ。

あれ見よ渡邊。あの原に捨てたる牛のしがい、時々腹のうごめくは心得ず。生なき物の動くには有らじ、我心の疑ひもや。

と宣へば、

何條去る事の候べき。怪しきを見ながら打捨て置くべき様なし。

と弓取りなをし弦道ひろく引しほり、切つて放せば初せめずつばと立ちし矢よりも早く、牛の腹より鬼同丸つと顯はれ、

エ、仕損せし口惜や。

と頼信目がけ駈りよる。

渡邊片手にひつ掴み、うんと云はせぎうと踏みつけ、

ヤアねつそりの牛盗人。ちよろいたくみのあめだ牛。もうく外に全類ないか。我君を一突とはべらの子のあべかこう。

天角地目天罰自滅、牛の最期は立處。首捻切つて捨てたりけり。

山際に一聲ひいき、起り立たる伏せ勢隙間もなく取りかこみ、

ヤアく頼信妹小蝶が仇を報ふ將軍太郎が恨みの劍、遁れぬく。サア腹く。とのしつたり。

渡邊からツくと笑ひ、

何腹とは腹のかは。一代ならず二代の朝敵、切り平らぐる武將の役。王城守護の多門天、

鞍馬みやげは儂れが首。

と抜きつれて渡し合ふ。

味方は主従三十餘人素肌武者。敵は十倍三百餘人鎧武者。喚き叫び入り亂れ打伏せ、切伏せ追ひまくる。野風山風吹雪を誘ふ。軍は花か降る雪は、綿を飛ばしてひらく。誓時の内に野は眞白、白雪變じて紅いの死骸を埋む尺餘の雪。よろめき打合ひ戦ひしは危かりける次第なり。

巷軍のまたく間に多勢大半討取れば、味方に残るは主従二人勇氣たゆまぬめつた切り。

叶はじ物と將軍太郎殘黨引きぐし落て行く。

ヤアいつくまでも。

と頼信朝臣追絶ふて追かけ給へば、渡邊聲をかけ、

盜賊半分の悪黨、大將の御手には勿体なし。某仕つらん。

と駈出づる。

雪おれ松の木蔭よりついで出てかけ隔て、『頼平を見忘れしか。將軍太郎に荷擔人。』とをい

やくも無く切つて懸る。

思ひがけなき渡邊、さすが主君と容赦して受ながし組留めんとあしらふ刀、勝に乗つて打刀、引はつし打ち落し、むづと組んで取つて伏せ、袴袋のかへ紐しとき高手小手にいましめ、

こはそも如何なる天罰にか。朝敵にくみし、家來に搦められ給ふ。源氏の名おれ。弓矢の冥加に盡き給ふか。

と惘れ果て、ぞ立たりける。

起つ轉びつ詠歌の姫雪踏み分て走り寄り、

なふ淺陋しい細目にかかり給ふか。千万云ふても返るにこそ。情知らぬ武士よ。我を代りに千筋のなは、一分だめしに切りさいなみ、頼平様を助けてたも。

と歎きあてがれ給へども渡邊は見向きもせず。頼平憶する色なく、

斯る大義に與みするからは、首は懸門と覺悟せで有るべきか。今更驚ろく細目にあらす。源氏の嫡孫頼平が身の難儀に及び、手のうら返へす根性さげ、未代のそしり無念至

極、殺さるか助かるか、今日の落着極るまで我は啞聲。サア無言ぞ。

と齒を喰ひしぱり、思ひ切つたる眼ざし。

チ、そのお心に定まるからは我とても一心すへ、一所に生死かたづく迄物云はじ聲立てじ、夫婦全じく無言ぞ。

と口をつぐみ目を見合ひ、いはで物思ふ音なしの、瀧と涙はみなざりて雪は雲と解けにけり。

時こそあれ頼平の乳兄弟箕田二郎、行衛を尋ねる旅出立ち。斯くと見るより息をきらし、て駈付け。渡邊をはたと睨めつけ。

ヤア慮外千萬、何咎あつて我君に繩かけし。詠歌の姫は頼信公御心を懸られしといへども、定まる御臺にもあらねば、頼平公において聊か不義の誤りならず。一たん若氣の戀慕の習ひ、父親の禮をつくしみ、陰をし給ふ迄のと。繩をかくる咎なし。と解かんとする手をもぎ放し、

和主が母は渡邊が爲めには指渡した伯母、然れば和主とは親き一家なれども、心安きは

私し。まさしく主君たる冠者殿に、粗忽の繩をかくべきか。慮外とは過言千萬。將軍太郎にくみし、御兄頼信公の鞍馬下向を待伏せし、たつた今大合戦まがひなしの朝敵。指でもさし、ば御分も一味。誤りなき伯母ごせ迄、罪に落すか狼狽者。と繩を控へひつそふたり。

ナニ將軍太郎に一味とや。ハッ言語道斷の御所存、情なや淺ましや。

と頼平に縋りつき驚動の涙にくれける所に、大將頼信將軍太郎を見失ひ、齒がみをなし歸り給ひて、

ヤア箕田二郎、天下の怨敵と成つたる頼平をかばふは汝も朝敵一味よな。纒色をそんじ、

朝敵一味かとはお目が明かぬ曲がない。もとより冠者殿の乳兄弟、大殿頼光の御目がね、頼平が後見と仰出だされし上は死する共、同じ枕の某。落失せ給ふも知らず、將軍太郎に與みし搦め捕られしも知らずして、武名ながく癡り、世上の誇り笑ひぐさ、一家の耻辱。大將の御情、咎の實否極るまで某に預け下さるべし。此願ひ叶はずば腹かき破り、

第一光景 頼光館

時日 〔永延三年二月二十七日(第一光景) 前光景の翌月四日(第二光景)〕
 主意 乳母及び其子箕田二郎の苦心により頼平をして悔悟せしむるに至るを寫す

狐は尺寸の穴に隠れて千里の虎を圖り、一賢の唯々は千愚の筭々をふさぐ。武將源の頼光朝臣市原野の一戦御家督頼信切り鎮め給ひ、帝都靜寧なりといへども、將軍太郎良門跡を晦まし落失しかば、五畿七道は云ふに及ばず、山林僻地の隈々迄尋ね求むる配符の下知、今や訴へ來るかど、玄關廣間評定所、一間の諸役人心を屈し待居たる。こゝに詠歌の姫の御父江文の宰相爲成卿、北の方萩の對、息女詠歌の姫頼平に誘はれ都を出て、剩さへ頼平朝敵と成る、その咎逆隣甚だしく。朝家の裁斷として宰相夫婦、閉門の罪に押込められおはせしが、今日罪科極り、武將頼光にその沙汰すべしとの勅詔にて、左右の將監將曹ら前後をかこみ、頼光の御館に來臨有る。卜部末武臼井の貞光仰せを蒙り受とれば、警護衛府の官人ら大内にこそ歸りけれ。

末武貞光夫婦の人を決斷所に誘ひ、つゝしんで、

出羽の冠者頼平野心をかまへ將軍太郎に一味により、頼信これを棚め捕り天機を伺ひ候へば、苟且ならぬ天下の大事、兄弟の縁みは私し、朝敵征伐は將軍たる身存する所、死罪か流罪か古例古法に任せ、頼光が所存の通りに計らふべしとの勅詔にて、頼平は斷罪に極まり候。扱御前の御とは今日迄は朝廷の御計らひ。今日より武家に仰せ付けらるゝ條。官職を削り冠裝束を剝いで、夫婦共に布衣跣足の平人となし、都の内を追放すべしとの諭言もだしがたし。頼光ちきに面談にて申渡すべき所、右勅詔の上は今日より土民町人同然。我々兩人承はり、鳥羽大路にて追拂へとの下知。イヤ冠裝束剝取り申す。と兩人左右に取付けば、『是は』と計り北の方押へだて聲をあげ、

なふ待てたべ。此度のお咎め御尤とは申し乍ら、宰相殿の身に取つて露程もあ誤りなし。頼平に添ふ詠歌の姫。娘のつみとのなこらばは一ツの申譯。もと彼の姫は宰相殿の種にてなく、自異人に添ひて設けし娘。宰相殿へ嫁入しは詠歌姫が五つの時。里より連し我子なるを、表むきは宰相殿と二人が中の娘と云ひなし、今日まで育てしは申すに及ばず誰々

も能く知つたると。我種ならぬ娘を隔てなく養育せられし其恩も報せず。刺さへ娘故に家も身も滅ぼす此悔み。宰相殿は心耻かしく色にも出だし給はねども、自が心の中悲し共つらしども。高きも賤きも女は夫に威を付け、夫の恥もそごとこそ本意なれ。我ゆへ夫の身の滅亡。此愛きつらきは筆詞にもつくされず。姫が親は此母ひとり、如何なる刑罰死罪にもあこなひ。宰相殿の身身の立つ申譯、言上してたべ兩人。

と人目も恥ぢず泣き叫びくどき給へば、爲成卿、

ア、未練なり、種こそわけぬ今日まで娘よ父よと言ひ語らひしは必定。譬へば斯様の災難なく、頼信殿の御籠中になり、世に侍^{かしら}かるゝ時はおしだまつて實父の顔、我子で無しとはよも言はじ。他人さへ人のおちめ。况んや隔てなく愛をなし、孝を盡くせし詠歌の姫、今更我種ならずとは此爲成は得いふまじ。

と制し玉へと聞き分なく、

いや／＼姫に實の父はなし、父にも母にも我ひとり、御訴訟頼み参らす。

と殿上雲井の上臈の家來とも云はん武士に手をさげ詞をさげがみの、疊に打付け打亂れ、

聲も容儀もくずおれて、歎き給ふぞいたはしき。

末武貞光あはれとは思へども詞をあらへげ、

御ひきやう至極。養子猶子も世のならひ、たとへ種腹かはりても、一旦世間披露の上は親子の名は削られず。特に朝廷にて其役々の公卿大臣、彈正臺の御詮議極り、解官追放との論言。主人頼光違背叶はず。却て違勅の罪を重る道理。一先帝都をひらき御詔言のとはり、幾重にも有べきと。我々は勅命主命。つれなく思召されそ。

とずつと寄て冠はたと打落し、装束かたぐり、

江文の宰相爲成夫婦御追放、役人参れ。

と呼ばれば、雜式北面制竹鐵棒あたりを拂ひ、末武貞光跡を押へ、林を辭する狩場の鳥、射卒に追はるゝ風情にて、歩み給ふぞあぢきなき。

百年の雪霜一身に積り、鬢髮氷の銀拵へ、朱鞘の大小古風にそめる袴の裾顔の袴、一ト理屈ある時代親仁玄關に立かゝり。

愚老は佐々目少貳と申す者、武將頼光君へ直訴申すとあり。罷り通る。

とすつとはひりの柳の間、櫻の間の番衆色立て、

ヤア無禮者狼藉者、下れ退れ。

とどはめれば返答もせず盤桓たり。

大宅忠正立出で、

じぶんの伺候か、但しお使者か、御舍弟出羽の冠者頼平のお詫ならば無用、取次を申す

と叶はず。お茶でも参つてお歸り。

とすげなく立て入らんとす。老人けらくと笑ひ、

取次願む程なれば、宿所にぶんどり歸り、娘や孫に足さすらせ、寝ながらつ一筆啓上でも事は済む。頼光の耳へ此口から云ひ込む天下の大事。玄關端近で打明ふか。よしよくおくのどろくにひつかみ、人あめする大將に逢はんと云ふも無骨なり、御臺所に對面せん。サア奥方の案内く。女中く。

と殿中ひやくしわがれ聲。

忠正みだけ高に成り、

ヤア緩急至極、浪人が主持か如何さま雜人匹夫とも見へす。貴人の御殿出仕退出の格式は知る筈。殊に武將のお館、のさばり過ぎたる振舞醉狂か老書か。引つ立てられよ當番衆。

心得手んでに取りまく鼻捻、突棒刺又もぢりどち、白銀みがきにきらめく老眼八方見ひらきにこと笑ひ

恐しく、チ、こは。益の様なる年寄に是程に立さわぎ。まさつと強い若手の敵に出合はは何程に騒がふぞ。突棒刺又が恐しとて言ふと言ぬ少貳でなし。サア打て見よ突て見よ。

どちつ共おくれぬ勢ひ、『將軍太郎が殘黨ひやうげ者に紛らし、我君に近付き寄らん謀。それぶち殺せたく殺せ。』とひしめく所へ、御奥小性聲々に、『是々、其者荒くいたすな、我君御見参との誑意。シトく』といふ警蹕に、各持たる兵具を捨て鎮まる内に、御大將悠然として御座につかせ給ひければ、無禮でんぶの老人も、始めの一徹引きかへて、威儀をたし躊躇する。

暫有つて御大將、

佐々目の少貳とは翁よな。終に名を知らねば面も見ず。譬へば遠き道を行くに、山坂海岸の難所あるがごとく、上一人と下萬民の間は次第の取次ぎ、下の誠上へ通ずと思ふ、切なる心より所を忘れ、當番に對し我儘を云ひたるにてぞ有らん。自分の訴訟か但し頼光が政道に邪有るを諫言の爲めか。氣をしづめ心底を殘さず語れ。

と御誼の中より、老人御前の疊に額を付け、泣きしほれたる顔をわけ、

アツア有りがたい。無禮狼藉の御どがめもなく、心を鎮め申せとの御慈悲心。貴人と下人との心は加程にも變りしか。柳にこつたふ巽鳩の小鳥が、九萬里の空とぶ鵬の大鳥を笑ふとは、ぢいめが身にひつしと存じ當る。去りながら上天子大臣より眞柴かる山がつ藻鹽やく蟹までも、かはらぬ物は親子兄弟の恩愛、いかなれば我君は御弟をうとみ憎み給ふ。

と申しも果ぬに御氣色かはり、つゝと立つて入り給ふ。續いて駈寄り禁色の裾、しつかと縫れば、怒れる御聲。

何ごとをか云ふと思へば、つきもなき親子兄弟の噂、推量に違はず頼平めが訴訟よな。何

者に頼まれし、天下の鏡と成る頼光が心、憐れらが知るべきか案外なり
とち説有る。

老人憚る色なく、

イヤ、弟を憎むを以て天下の鏡とは申されまじ。生れ年こそ跡先なれ、弟も同じ親の血筋。兄も弟も心に換りなれども、若き時は血氣内に強く、兄親の心に叶はぬがら。その度ごとに血脈を捨て、日本國天地人倫の道絶へはつるを、鏡にしては受とられず。中にも頼平殿は乙の若君御母君の御愛子、是を殺しては御母への御不孝。不孝も天下の鏡か。その上一代一度の訴訟は、何ごとにも叶へんと堅き御契約の方も有り、武將の御身に契約を違へ給ひて是でも鏡か。愚老が目にはわれ鏡。是申し、鏡のくもりは研げば晴る。いかな上手の鏡ときも、破鏡はつぐにもつがれず。天下を照すは及びもないと。どこぞ田舎の山寺の、鐘鐺の奉加に入り給へ。

とはぐき斗りの大口あけけら／＼とぞ笑ひける。

頼光御座に歸り給ひ、

弟を憎むとは筋なき事を申す者かな。頼平めに連添ひし、詠歌の前の父母江文の宰相夫婦、勅諭を以て唯今追放。况や本人たる頼平宥免叶はず。其上一代一度の訴訟叶へんと詞價を取つて我をさみする胡亂者。その契約は頼平に乳房をふくめし乳母、則ち渡邊の綱が伯母。綱が未だ若年の時つれ來り、父母なき孤ながら筋目ある悴、弓取に守立召仕とてくれたりし其褒美、所領は受ず財寶は貪らず、訴訟あらば何事にても一度は叶へんと契約せしは、渡邊の綱が伯母なるぞ。佐々目の少貳と云ふ者に契約せず。立つて歸れ。」と宣へば、

ムウしかと伯母には御契約ありしな。その伯母こそは某。君にも覺へ有るゆへ伯母が便りどあれば一子箕田二郎幾度か参つても、御門より追返し御取上も無きゆへに、我等直に参りしも兩三度。表裡ニケ所の御門御臺所門迄も、伯母が参れば通されず。取次ぐ人もなき故男の形にまなび、滋シヅひもなき雪折の、枯竹をため直すごとくに、屈みし腰骨おし延し、指しもならはぬたち刀、取次ぎ頼まずむたいに御目にかゝらん爲めの此有様。伯母が一代一度の御訴訟とて此上なし。サア御契約は何とく。

と詞詰。

イヤ／＼頼光が契約せしは女なり。汝は佐々目の少貳にあらずや。罷り歸れ。

とつれなき御説。

エ、理屈過ぎたる御大將。女に成つて見せ申さん。
 とついと立つて袴の紐引きかなぐり、ぐる／＼解くかひたち帯、重ねし衣裳ひらりと脱ぎ捨れば、百年にひとせ足らぬ姥櫻、艶もかれ木の裸身の、乳房は賤が干蕪、腰のゆもじの紅むに、紅葉しからむわばら骨、肉も落てさし波じは、いと女は骨細の膝折かゝり、北山風吹き通し聲も冷る大廣間、五躰も凍まがち／＼ふるふはなきをくひしめ／＼大聲あげ、

頼平公へ乳をあげち目通りに仕へし者、異國も見ぬく御眼力よも見忘れ給ふまじ。佐々目の少貳と名のればとて、男と女御らんじ分けで有るべきか。よふもくち心づよふ婆めに物を思はせらる。餘りむごき我君や。

とがつはと伏して歎き居る。妾は地獄の繪、竹の根をほる罪人の、罪を悲しむごとくにて、

いたくしくもあぢ氣なし。

伺候の人々袖引合ひ、『最前の振舞ひといひ善悪につよき婆。羅城門の變化が渡邊の伯母に
ばけ、取られし腕取り返せし、鬼さへ真似るゝばなれば道理く。』と嘯きける。

奥にも斯くと聞ゆれば御臺所のお耳に立ち、取あへず御出であり。

なふ渡邊の伯母か、珍らしや床しや。始めより聞くならばすぐに奥へといはん物心には
無うらみ。若い時より謹み深い和女が、百になつても女の肌身いとし、やよくくなれば
こそ。見る目も悲しいわれ早ふ物着せよ。

『あゝ』と云ふより女房達下襲よ上着よと着せても押やり打かくれば押のけ。

いやく、着せて下さるな。彼の深山のこけ猿が形は人に似て皮を着るゆへ獸、皮を剥
げば寸分人に違はずと聞く。我も猿同然、大額にぬき上げ、男わけの白髪なでつけ、此
上に皮着ては、君もあ見知りなき佐々目の少貳と云ふ男猿。その儘皮着ずにも見知りあ
る頼平の乳母綱が伯母御契約はたがへらる。誰かひとり取合せどこへ取付く枝もなき、
木からあちた猿ばい。凍死なせて下され。

とふるひ上りく、恨みくどく唇うるみ舌ちいみ、わななく聲に涙をふくみ、

エ、うらめしいつれない御夫婦や。血を分けぬ他人さへ氣をいため、いとをしや詠歌の
姫の物思ひ。我子箕田二郎毎日毎夜御門に立つての御訴訟。是らの夢目に比べては、婆
が裸は數ならず。此世で綾錦八九重の重ね着も、養ひ君の命乞ひさへ仕果せず見殺し
にする罪科。とても三途河の奪衣うばに剣を取らるゝ。着て何せん。

とあたりの小袖おしやりく、わつと叫ぶ聲限り、枯れ憔悴たる瘦骨を、しぼる涙は八寒の
氷どいてる計りにて、御臺を始め女房達ともに袖をぞ絞らるゝ。

見る目に堪へかね御臺所立寄りてお手づから、小袖取り上げ打着せ給へば、數多の女中立
ちかへり、袖を通しつ襟引きつくりい前かき合せ、涙に沈むしつはた帯結べばほどく伯母
が手を取りお膝の上に引き寄せて、

なふ乳をふくめし好みにさへ左程までの心盡し。産落し給ふ御母尼公の草葉の陰の御苦
しみ。満仲公の御子とては御兄弟只三人。高きもひくきも乳の末とて乙は猶いとしきも
の。御母尼公御臨終の今はの枕自らが手を取つて、なからん跡にも頼平を小鼻とばし思

ふな。おとが胎内より産落せしと思ひ、憐みかけてと斗りにて、お目をふさぎ給ひし面影は、今とても忘れず。御在世の間は六孫王の嫁君、御威勢と云ひお身の榮花、肩をならぶる者もなく。此世を去り給ひ御吊ひ御追善、何におろかも無き故に、自が嫁づかへの御奉公は一ツもなし。せめて頼平殿の命を申し助けずば、御位牌への云譯なく。エ、云ひ甲斐なき女と、未來よりのお恨み悲しくやる方なく、さまざま申しなだめても、二代の朝敵に與みする頼平、私ならぬ朝廷の囚人、母の遺言とて免しては國家の政道くらやみなりとの御立腹。此上は自ら思ひ切る。頼平殿の事はふつと思ひ捨てたも。やいの〜。

と上はつれなき詞のうら推量せとの心の目ませ、御袖のかけに手を合せ頼光の目を忍び、伯母を拜み伏拜み、頼光と云はで頼むとは、涙が云ふぞいたはしき。

大將更に見やりもせず、黙然としておはします。御膝元につゝと寄つて聲をあらはし、
 エ、心づよい我君。強い計りを勇士とは申されまじ。暴虎馮河して死するも厭はぬ大將には随はずと孔子も戒しめ給はずや。二代の朝敵に一味するその頼平の親類の我々皆全

罪。サア一ばんに此婆御成敗。獄門の木を常よりは五尺も七尺も高々とかけさせ、政道に私なき武將の心を一天下に顯はし給へ。

と膝立て直し憚りなく、座を打てこそせりかけけれ。

頼光甚だ感歎あり、

言行揃ひし義者の振舞、渡邊の綱が伯母といはんは恥しからず。始めより左は見つれども所存計りがたく、佐々目の少貳と聞き流せり。頼平が罪科明日首を打つに評定極り助けがたき命なれども、一旦の契約心さしもだされず、今日は廿七日先考満仲の御命日、今日より七日を限り、來四日まで頼平が命をおとが爲に助け預くるぞ。其間に教訓し野心なき心底世に顯はれ、江文の宰相勸を免され、歸參あらば、永く命を助くべし。左もなくば七日過ぎて四日の曉、八聲の鳥を限りに討手を遣はし首はぬるぞ。其時我を恨むな。

と御座を立つて入り給ふ。

伯母ははつと頭を下げ、又くりかへす嬉し泣き。御寮所も又伏拜み、「殺さるゝを助かる恩

はめのどの母なり命の母』と悦ぶ内にも七日の日切くる、月日はかり寝の夢、二度の愛目を見よふかと思ひ過ごしの女心。

コレなふ氣遣ひ遊ばすな。悪につよきは善にも強し。善と悪とはたまり水みちびく方へ随ふならひ。上々吉の和子様に仕立て上げるは婆が手きは。箕田二郎詠歌の姫君さぞ待かね。長居も恐れ。ヤアをい〜。

の聲斗り居すくはりて立ちかねれば、扶くる上臈女房達、襟引合せひとつまへ、三つ子も同じ老の身は、帯もか〜へも人まかせ、妾は老女あたまは親仁、下戸はなくとも妖物は有る世なりとぞ吹き出しける。

なふ是々、嵐はげしき道すがら、頭も冷ん。

とあ心付きし御きせ綿、御恩も深き丸綿帽子、名残はつきぬ藜の杖。『乗物にて送らせん。それ〜。』と宣へば、

ア、勿躰ない。乗物まだるい氣が急ぐ。杖さへあれば今でも廿里卅里は、遣りかねる婆ではちじやらしませぬよ。ナア久しう腰をのして痛かつた。思ひのまゝに屈めん。

とあしよぼからげの杖ほく〜。つく〜思へば茨木童子はあばに化けおのが腕を取りかへす。今の伯母は男に化け頼平の命を助け歸る。妾は又伯母御。額をかくす渡邊の庵へこそは歸りけれ。

頼平を悔悟せしめんが爲めの乳母の苦心を狀す。

第二光景 箕田宅

天が下なる人は皆君が田簀の鳥近き、渡邊の伯母が云ひのぶる、七日も今日と夕露のあだの命の葬は、明日まで待たぬくだかけの、鳥限りこそ果敢なけれ。

浮世の頼み今日の日に、皆腰折の詠歌の姫。母の譲りのます鏡向へば是も名残りぞと、親には誰かつげの小櫛の髪水と、涙はら〜原野に落す露の身の、最後たしなむ夕化粧。うつす我身は母の顔。

ナア母様、是は〜御きげんよい笑顔拜みましお嬉しや〜。わたしが事を苦にせずとも、御無事でながら〜下さんせ。

とゆふべの烏夕雀啼もとむる聲々は、思ひもなげに羨し。

●●●
 箕田二郎纒世の取り沙汰を聞き合せに、今朝より出て、立歸り、我家を見入れ頼かぶり、
 猶引しめ顔を包み作り聲。

ヨウ／＼見ごと／＼。夕暮がたの夕顔化粧。歌の文字は卅一字それを打こへ卅二相の詠
 歌様。大唐四百餘州の美人のかいさん、楊貴妃虞氏君西施李夫人王照君もそこらへく
 及びもない事。日本は六十餘州神の嫁御のこの／＼この花咲くや姫、富士の裾野に竹ど
 りの翁がひらふた寶娘、衣通姫もはだしで裸で逃さんしよ。天から降つたらしたてる姫
 海からわいたら龍宮の乙姫、さほ姫、おり姫、天人のやぶ入りか。世界にたどへる花も
 なければ、紅葉もあよばぬひすいの黒髪。しんどう／＼三日月なりの目元の釣針。つり
 く／＼た殿御はやれ扱ひら平様世界の男の命の山だち。沖つ白波たつ名もわざくれ。
 體も尸も熨斗をつけて進上申す詠歌の姫様。ちやく／＼やつちやく。
 と譽詞。はつと興さめ詠歌の姫逃入らんとし給ひしが、能く／＼見れば箕田二郎。

イヤア續殿かこなたは本氣か。頼平殿のお命は曉の鳥限り。年寄つた母御の心遣いと云
 ひ、此家内に人心地の有る者は一人もない。時も時折も折今朝より邸を出でありき、漸

々今歸つていつにない大聲上げての戯こと。人の云ふのも叱りそうな乳兄弟のこなた。
 わたしを天人か楊貴妃か。譽られたふない聞きたふない。日頃の忠節だて皆偽はり、相
 手に成るもいま／＼し。
 どかけ入る裾をしつかと取つて頼冠りかなぐり捨て、

此纒が戯言つくす偽はり云ふと、こなたの目にもみごと見ゆるか。こなたの眼に見へは
 せまい。こなたに教へらるゝ迄もない、頼平公のお命、鳥を限りとは七日前から知つて
 ある。もし頼光御兄弟のあはれみ七日と云ふて明日へも明後日へも延るか、都方の取沙
 汰聞かんと思ひ、今朝より宿を出で、淀柱本の邊まで参りしに、なふ武將の詞は繪言同
 然、頼平公の討手として、むいき者の坂田の公時罷り下るに付き、御用船に印を立て川
 筋きびしき舟どめ。扱は頼平公一期の落着今宵にありと、息を切つて歸る所、客待つ暮
 の若傾城が妍自慢のべに白粉。只今譽たは譏りのうら。詞で面をくらはしたが、ちつと
 胸へこたへたか。いたはしや頼平君廣き世界に御身をせばめ、未長きお命を今宵にちい
 め果すと、元の起りは其妍ゆへ。武將頼光を始め奉り御兄弟御一門の恨みは御身一人。

そののみならず御親父江文の宰相殿、勅勘受て官位を削られ、追放の身とは何故、皆その紅粉白粉のゆかり故。誠女の道を申さば、討手の向ふ今はの際まで絶つて御意見申し、お命を延すが夫を思ふ眞實。此眞實がないからは顔は美人心は佞人。其水くさい心とも知らずほだされ給ふ頼平の御運の程がいたはしい。エ、見限り果たる女中や。

と齒にきぬきせず眼にかど。

媛君ちつとも驚かず、

ハテこゝなお人はきやうとげな。頼平様のお命今宵限りとは、今更驚くとかいの。元の起りは詠歌故と御兄弟一門の恨みとや。尤もなれども自らか父母は又頼平様ゆへと無恨み悔み。それは互に人のならひ。高いもひくいも夫に連添ふ女の道は、一旦も二日も御意見申し承引なければ是非がない。夫婦は一所善人なれば我も善人、悪人なれば同じ悪人。さきへは死ぬるとも片時も跡へはちくれぬ魂。ユレお侍、討死と極めては、鎧物の具さはやかに出立ち、美事に死ぬるでないかいの。まづ其とく源の頼平が妻詠歌の姫が最期に取亂し髪かむじにも櫛の齒入れず。けはひ化粧も繕はず、見ぐるしい死顔と云は

るは誰が耻。なからん後迄さすが頼平殿の妻よ北の方よと。お名を汚さぬけはひ化粧。客待つ暮の君傾城の夕化粧と一ツに見る箕田二郎殿。いとしゃ此方の目はくらんだのふ。

と一心すはりし聲高く、漏れ聞こへて頼平公妻戸あらくに引明け氣色をかへ、母は老女のくり言尤もとも云ふべきに、若き武士に似合ぬ愚痴の意見。是にも非にも頼平が齒より外へ出だせし詞は鐵石。金剛舍利は砕くるとも變せぬ心。女などの意見を聞くべきか。イザ詠歌こなたへ。

と振返る後ろより、おば禪尼が弓杖の村重藤、おつ取りのべて丁々々。なごり情も『なふ悲しや』と取りつく詠歌を取つて引退け、たゝき伏せく。

扱々曲もない。御身の言は金石よりかたく、此ばしが頼光へ、御意見を任おほせんと交ひし詞は土か砂か。とツくに頭も剃りこぼつ筈なれども、甥子と云ひ養君大事の弓取。もしもの事の有る物と、惜からぬ白髪の手筋もんに髻かけし其徳に、此度の訴訟を嫌ひ、關白殿の御使にも御對面なき頼光へ、婆が額に角を入れ佐々目少貳と云ふ男に成り

し故にこそ、七日の命は延したれ。もはや浮世の望み是迄と剃りこぼちし甲斐もなく、直らぬ其根性に噴毒をもやす。剃つて口惜い。乳をふくめし此婆こなたの偏意地は知つて居る。善悪とも云ひ出す詞變せぬ癖。そこを押付け強意見する婆が癖は覺へがござる。サア耳あるふせうに聞いてもらを、眼有るふせうに是見たまへ。御父満仲公朝敵退治の御弓、不孝の悴を諫めの杖渡邊の伯母と覺したら、三五の十八大きに當がちがを。いたはしや所縁とてあの姫君の御父、江文の宰相爲成卿勅勘官位を削られ、都の内を御追放のと聞きながら馬耳風じやの。御身を世繼に立ぬと云ふ頼光への恨みか。兄頼信を妬んでの朝敵か。金石より堅き心を婆が瘦腕に、打くだいて呉ん。

と又振り上ぐる腕に縋つて『誓し』と計り、涙ながらに聲を上げ、

廿四孝の伯愈が父の杖のよはりしを歎きしは孝行。今頼平が満仲の御持弓に打るゝは不孝の筈。理非善悪を辨へぬ我ならねど、焦たる種は芽を生ぜず、落花枝に歸らず。たどへ命は助かりても嫂となるべき詠歌の姫を妻として、のめくど兄弟諸武士と座を列ね膝を組み、世上の後指、生たる甲斐の有る可きか。よし是は味方一家の恥計り。將軍太

郎は桓武天皇の末孫、出羽の冠者は清和天皇の流れ、互角の大將はれわざの契約。牛の血を神水として云ひ交せし詞を變じ。源の頼平が女を人質にとられ、詮方なく、太刀打の勝負は叶はず偽りの一味をして、當座の難を遁れし臆病者ひきやう者、源氏の武道の奥知れたりと嘲り笑はれ、他門に恥を残してもおめくど存命て兄頼光の御爲に成るべきか。又我契約の詞を違へず、あつばれ源氏の殿原は詞を變せず信を堅く守て討手を引受け仁義の刃に死したりと譽れを取つて死たるが頼光の爲に成るべきか。勿論親子の意見一々理に當つて尤もなれども、武士の上には道に背きて道に當ると譬へば黄金は寶の最上なれども、高山にのぼり咽渴して疲るゝ時は、千金萬金も一杯の水には劣つたり。錦は上なき美服なれども六月の炎天には一重の麻の太布に蜀紅の錦も及ばぬぞや。然れば何事も時ぞと思へ夏來ては錦にまさる麻の小衣と、詠せし古歌も武士の身にひつしとあたる。市原野の合戦に雪と云ふ文字のよみこそ、耻を以て耻をそゝぎ悪名を以て悪名を清めんと、兄頼信に雪をつかんで投付け、交ひし詞を無になしては兄弟はなを弓矢の意地、泣き寐入りにはしまはれず。此間を了簡し偏意地とばし恨むるな。討手の武士は

誰人か禮儀を以て向はし、我も禮義を以て尋常に切腹し、首を討るべしと思ひしに、武勇自慢の猪武者公時が向ふとや。定めて朝敵退治なんど、のゝしるは必定。その時某將軍太郎貞門が副將軍出羽の冠者頼平と名のつて、腕の力太刀のかねのつゝかん程、思ふ様に切りちらし、恨みの腹十もんじに切り破り、末代に名を残さん。なふちとが乳をふくめ養育して、人と成せしは誠の母も全然。木石ならぬ頼平が志をむげにして恩を忘るゝ事はなし。恨みを晴れよ。

と計りにて、伯母が袂に縋りつき、聲もおしまず泣き給ふ、御有様のいたはしさ。

伯母は覺へず聲を上げ、

なふ其お心をとつくに打明け給はぬ。あつばれ御器量大將や。夫とも知らず此ばしが鼻のさきの走り智恵。悪ぞう云ひたる舌たれ打擲のしは腕も、おれよくされよち主の罰天の罰免させ給へ、和子免して下され。

と持たる弓をかりりと捨て抱き寄せ撫でさすり、泣きくどく老のくどくは文字餘り文字たらず。詠歌の姫も纒も、共に涙の雨そゝぎ座敷もひたす計りなり。

ヤア泣くまい〜。此曉の八聲の鳥、養ひ君の初陣目出度き折から、女なれ共家一ばんの老武者、討手の武士に無禮あらば直にこゝを軍の場。和子を始め一人も生残らん者はなし。コレ箕田二郎、門にしつかと銃おろせよ。

と涙をといめ、
卒わつさりと最後の酒宴。御着に婆が一さし舞ふ。今こそあれ我も昔の十七八、油どろりと紅粉鐵漿白粉、生れ付きのしよていに、戀がありし故、いかな男もしなだれかゝる柳こし。今はるびこしヤアを〜。

と立上り、涙に濁るむしやら聲、

七つになる子がいたけなことを云ふて殿か欲しいと謠ふた。殿よりも花よりも養ひ和子のお命が、ま一つ欲しやいとをしや。

と又泣き沈むを取りなをし聲はり上げ、

あらが若い時や腕になま傷たへなんだ。今でも二つや五つはあんだ樊噲だ。張良だ。樊噲張良よそならず。

と打連れいりし奥座敷、兵の交り今ぞなごりの酒宴なる。

風が持てくる一村雨、窓うつ聲に打まじり、用有りげに門の戸を忍びやかに敲く音。胸にこたへて詠歌の姫酒宴の座敷をそつと抜出で、走り寄り小聲になり、

夜更て誰じや何者じや。

ムウ答むる人は慥か娘の聲と聞く。詠歌の姫でないかいの。

ヤア扱はお前は母様か。

ヲ、きどくに聲を覺へてじや。成程そもじの母江文宰相が妻萩の對。

ナアお床しや、久しぶりで御無事なお顔が見たい床しい。

と隙間を求め尋ねても、錠はかたく塀高しいつ蟋蟀のふみ明けし、壁の破れにさし覗けども暗の夜の、村雨はるゝ星影に見れば竹笠うなだれ、身は箕虫の蠢きて、

サア明けて〜。

の囁きも娘の耳には雷の落かゝるより悲しくて、

仰せなくとも明けてお顔も見たけれども、風も通さぬ關の木をび錠。日こそ多けれ夜こ

そ多けれ、今宵のお出では何事ぞ。頼平様のお命は此曉の鳥限り、私とても通れぬ命。

聞けば悲しや私故に江文の家もたへ父母共に勅勘とや。一災おこれは二災おこる。何とも前世の因果と思ひあきらめ下さんせ。討手の来るに間も有るまい。はや〜歸つて下さんせ。ホ、おとしや。

と計りにて、壁に取付き戸にすがり、聲をも立てず泣き給ふ。

去ればいの頼平殿の今宵討れ給ふとは、世間の流布に隠れなし。それに付いて来たはいの。宰相殿の勅勘もそもじにつれて頼平殿の所縁ゆへ。母こそは血をわけたれ、宰相殿はあかの他人。種もあろさぬ子故の難儀。さすが公卿の心清く色にも出だし給はねども、母が身に成つて見や、面目ないとも悲しいとも、夫に向つて一言も泣くにも顔は上げられず。聞けば今宵頼平殿は首を討れ給ふとや。頼光は武將の役目兄弟でも他人でも、朝敵うつは其善のと、珍らしからず、手柄にならず。長袖の宰相殿頼平の首討つて差上げ給へば、朝敵と縁切る證、勅勘免許、もとの官位に立還り、江文の家も立つべしと、刑部省の内縁にて内證を聞きしゆへ、討手の向はぬ其前頼平殿の首を貰ひに来たはいの。

身にかへて夫を思ふ女心、母も同じ身なれば苦がいも辛いも知りながら、酷いと云ふと思やるな。頼平殿を討すれば和女の方には孝行と云ふ道も立つ。サア手引して首尾よく討するか。但し仕損ずるを合點で踏み込めか。此二つが叫はずば此母が自害して門外に屍を晒すともすごいとは歸らぬ。時も移る短い返事と云ふぞ。

と打ならす鑼音の夜半のこだまの胸さきに、響き渡りて詠歌の姫、我夫の身の大事、今宵にせまる其上に、又親の身の難義何れを何れと捨てがたく、返答にと胸つき突じ煩らふ間を待兼ね。

サア、返事はと云ふ母が死ふか、切り入らふか。今宵の半時は尋常の十二時より大事の刻限、母が一世の頼みと分別所じや有るまい。

と急ぐ程此方はうるたへながら、いかに死身なればとて母の手にかけ夫の命取らせては女の道は皆あだど。背けば不孝と思ひ極めし初一念。五音をかへて笑ひ聲。

申し母様、そのお望みなれば能い所へござんした。幸い頼平様最期の酒宴の大酒。アレ彼の障子の内に前後も知らぬ高枕。死人を切るも同然。去りながら笑田二郎親子の人の

目かはやい。わたしが燈消すを相圖に忍び入り、暗處のしるしには頼平様のあつむり、永々のつゝしみに有髪のお月代、山伏の様な手に觸るを討てば少しも仕損じない。必ずおせきなされな。

と聞きもあらず、

エ、嬉しい。夫に替へて親への孝行。慥に母が恩にきる。此念力で塀を超すか、此松を傳ふても本望とげるは覺へが有る。サ忍び入らふ。

イヤ、八聲の鳥の鳴くまでに聊爾が有つては、預かり人の無念おちど。此上にせくとない。

とすかす内にも心までせきくる涙の玉櫛筒、剃刀の刃より思ひ切る心の刃切惜げなく、ついで切りてうば玉の髪、黒髪、嬋娟たる額も時の間に薙捨て薄、露の間を待つも我身の障子の内、明けて入ること哀れなれ。

門には母の萩の對姫の契約頼みにて、今やと胸に急ぐ心に永きしだりをの、鳥を待つ間も久かたの空や明るくと見渡せば、南無三寶、討手の上使とおぼしく高挑燈星斗のごと

く、五十騎計りの人馬の音。

『見付けられては、我本望の妨げ。』と篋笠取つて投捨て一足に小踊し、塀の腕木にしつかと取付きひらりと女の身も軽く、塀覆に打またがり、形をひそめ息をつめ、忍び居ること危ふけれ。

程なく公時召具の兵士に鎖の肌さ、鎗印馬印具足の唐櫃下人に負はせ、火影にかやく兜楯其身斗りは威儀を亂さず、烏帽子直衣枚を銜んで行くが如く、上下騒がずとなくしく、しづくと打寄せ、門しとくと叩かせ。

箕田二郎纒母の禪尼に案内申す。出羽冠者頼平君將軍太郎に與みし、今日七日に至りて非を改むる御心なきに依て、御自害をすしめ御首を討べしと、坂田の公時上使として参着。萬に一ツ各違亂あるに於ては、恐れながら是非なく一矢仕つらんため兵具用意致すと云へども是は世間の人口、武者の作法を塞がんが爲計り。只今にも野心を醸へし、御兄弟和睦公時が願ひ此上なし。去るに依つて烏を待たず前廣に参上致すと、幾重にも御意見を加へられ各諸共御蹄浴の御供願ひ存ずる。

と神妙にこそ述べにけれ。

邸の内には『すは公時よ油断すな、彼奴に似合ぬ禮儀の詞。猿の烏帽子狼の十徳くふなく。慮外せば赤頬首さらへ落せ。』とひしめげども、門外には聞かぬ顔、床几立てさせ袖かき合はせ、ゆうくとして扣へける。

塀の上には萩の對背を伏せ内外考へ見て『扱すさまじや此躰にては、頼平の首よも我手へは入るまじ、一ばん鳥は寝ほれて鳴かぬか。よし仕損ぜば夫まで。』と塀の上にさし覆ふ松のしげみに顔さし入れ、息の限りにはり上げ、鳥の鳴く音を二々聲三聲『家慶幸く』と空音をはかる人の聲、四境に聞こへて賊の鳥もばらくく、はなやかにこそ謠ひけれ。

門外門内すはやと色めく其隙に、小庭にひらりと飛下り見れば、闇の火は消へたり姫が相圖は是なりと、さがし寄る手に押し明けて入るとも人は白はりの、障子をさつと血に染めて、

朝敵將軍太郎一味の隨一出羽の冠者源の頼平を、江文宰相爲成一の太刀を討たり。

と高らかに呼ばはつたる。

家内もあはてふためく音、公時大きに苛つて割るゝ斗りに門打たゝき、響き渡る大聲、

討手をさし置きなま公家を引きこんで、頼平の初太刀を討する筈田二郎の法知らず。渡邊の伯母の沙婆ふさげの狸ばゝの生け年寄。公時に鼻あかせ手ぶりで都へ歸さふや。門明けけるに儂れら頼まぬ、公時が手打の鍵は見よ。

とゑいやとあす方に扉の脇坪腕がぬ動々所をかばと踏めば、貫の木中よりふつとちれ扉ゆがんで開けたり。

公時が挑燈こみ入つて庭上は白日。禪尼驚き走り出で、一間の障子押開けばこはいかに續が右手の肩先したゝかに切られながら、髪切りの詠歌の姫をかい込み、血刀持つたる萩の對、同じく取つて押へられ、

エ、仕損せし無念や。

と悔み悶ゆる有さま。禪尼も『是は』と動轉し、憫れて詞もなかりしが、續えんさまに膝行し、

母じや人も御上使も合點參らぬ其筈。けなげにも江文宰相殿の北の御方、頼平の首

討て差上げ、朝敵一味に縁を切つたる證を顯はし、勅勘を申し開かんと姫君にわりなき頼み。いたはしや孝行と貞節の二ツの道に迫り、其身が母の手に懸らんと、髪を切つて男の頭にまなび給ふ次第、一々立聞きし。親子の切なる志見るに忍びず、くらかりに母君の手を取つて頼平の名代、一太刀切られし此疵、誠の頼平こそ討ずとも血刀を此まゝにて披露あらば、明きらけき上の御裁斷勅勘御免疑ひなし。此上は姫君御身を全ふ頼平の御せんとを見届け給へ。萩の對の介抱我母と公時に任せ置く。

と親子をゆるめ押のけ、打刀抜くより早く弓手のあばらにがばと突立て引廻し、

出羽の冠者源の頼平の生害、サア首を討て公時。ヤレ首をうて公時。

と云へども更に合點ゆかず、さすがの公時きよろしく顔。母も是はと手を打つ所に、頼平走り出で給ひ、續が膝の上にとつかと居かゝり、

ヤイ氣違ひめ。最前より奥に控へし頼平を、おくれて出合ぬと思ひしが。公時が振舞を始終見届けんと猶豫する内、無用の儂れが身がはり、我命を助かり延延ひんと思ふ程ならば、公時に鬼神が加はつても、太刀さきにて切りひらき、やすくと生延びるに何の

と。身換りなどを頼まぬ。誰か思にきぬ空腹。エ、しなしたり、
と齒ざしみ恨み恐らるゝ。
纒わつと泣き出し、

エ、情なや。夜光の玉に一ツの疵。今纒か切る腹を御身換りと御覽する、御眼力こそ小
さけれ。物じて主君の身換りなど、申すは、御幼稚の御曹子若君が、扱は上臈女性にこ
そ命かはりし例しもあれ。遮ぎつて死にたがる殿に何の身がはり。源の頼平と名乗つて
首討るゝ纒は天下の爲の生害人。敷ならぬ纒が天下の爲とは事おかしく、推參がましく
覺されん。是には一ツの物語り。我君も母上も、ヤア公時始め供人も、嗚をしづめて聞
き給へ。物語りの種是なり。

と袖に入れし錦の袋より、懸緒の切れたる烏帽子一頭取出だし、

是は是れ去年霜月御家督定め召の時、纒が着せし烏帽子。其夜は内戚外戚の歴々、四
天王以下在京の武士役々所領の高下に随ひ、一人も残らず伺候の夜、小寐殿の燈を消さ
れ白羽染羽のやからの御悶、御臺所上段につかせ給ふゆへ、立まふ人は昔女中、其中に

彼の小蝶が艶色、並ぶかたなき情の風俗、若氣の某御勝手にて一献汲んだる微酔まされ、
座敷も闇のうつゝなく小蝶が裳にひつたと絶つて戯れしに、彼の女あのが懐中の七首を
もつて、ふつゝと切つたる烏帽子は是、切られしは此懸緒なり。剩さへ小蝶大音上げ、
天下の御大事評定の座敷、誰かは知らず闇紛れに、此小蝶にすかり戯れしなだるゝ不行
儀侍、不禮放埒の印の爲め、烏帽子の懸緒を切り取り。サア女中火を灯し懸緒を切ら
れし、それを證據に御穿議あれど、はしたなく喚きのゝしる其間、南無三寶纒の武名は是
迄、いきて恥を晒さんよりと刀の柄に手をかけしが、イヤ／＼死しては恥辱を誰すゝが
んど、思ひ返へせど死ぬるより外詮方なく、五躰の汗は直衣を通り百千萬に氣を碎く。
折しも頼平公聞きつけ給ひ、必ず／＼卒爾に燈あぐるな、頼平が思ふ子細有り、此座の面
々上下老若を限らず、一々烏帽子の懸緒を切れ、切り揃ふと一度に聲を揃へて案内せよ、
その時燈あぐべしとの御詞。違背に及ばず片はしより残らず懸緒をちし切り／＼、我も
各同音に、各々切つて候と申上げれば御前の女中、燈燭臺御座敷は日中とかがやけど
も、残らず懸緒を切つたれば誰か小蝶に切られしとも、互の心を探り合ふ斗りにて、其

座の武士に一人も悪名恥辱はとらざりし。此の御仁徳情の御恩の忝じけなき。須彌山を
 挟んで大海を飛び超ゆる世は有りとも、いかでか報じ盡すへき。あはれ此殿朝敵退
 治の御進發もあれがな、御馬の前にて討死せんと、時節を待ちし甲斐もなく、朝敵退治
 は扱置き、却つて朝敵と成り給ふ。歎きは我身一ツぞと、纜が心の底を知つたる者は、
 天が下に此烏帽子只一つ。産んだる母も今日が日まで斯くと言はねば知り給はじ。
 と見やれば母も目を見合せ、
 マ、愛いと任た。

と計りにて、ひれ伏し歎けば、姫君親子頼平君、むいきと名を得し公時も、涙見せじと挑
 燈の影へまはるぞ道理なる。
 聲いきどしくすなきながら、

コノ公時。天下へなげうつ纜が一命は、牛渡馬勃敗鼓の皮おしとは存せねども、此上
 にも殿のお心加ぬ其内は、我は修羅道の奴苦みを増すばかり。母じや人公時頼むは是
 一つ。無き後にも御意見たへず、朝敵一味の契約を切り給へば、それを修羅の矢さきの

楯につき、苦みを免かれん。

とくどけば母もあつと泣き、

ナフ頼平様あんまり我づよ曲もない。今生に息の通ふ内、將軍太郎に契約の詞を離し、
 御兄弟和睦との御一言を聞かせてたべ。そのお詞を願ひの糸烏帽子の掛緒につき合
 せ、未來成佛の寶冠の紐として、極樂浄土へ着せて遣りたいはいの。

とてがつばと伏して泣きければ、共に涙の顔ふり上げ、

我偏屈にこり堅まつたる心よりかたくの意見を聞かずあつたら武士を殺すと、頼平が
 一生の後悔。今日より斯く云ふも無益の詞。將軍太郎と契約を打破り、只今より兄々の
 御味方ぞ。氏神正八幡も照覽あれ此詞は違へぬ。恨みを晴れよ。

と宣ふうちより、『ナフはつ』と猶せきあへぬ親子の涙。とためて纜につこと笑ひ。

悔みなく恨みなき悦びの死とは纜が最期。サ、介錯／＼公時。葉侍の首をいかめしげに
 武將の御覽に入れるは恐れ。我首討つて溝瀆へもふん込み。只この烏帽子を上覽に入れ。
 此趣きの言上願む。サア首討たぬか公時。エ、息がきるゝ氣をますか。恨めしい公時。

と云へども知らずむす座し、

仁義忠孝そろひに揃ふた侍の首の討ちやう己や知らぬ。婆さまこなた討つて下され。

と獅子王の如き公時も、不覺の涙にむせびける。

次第に五躰の血はもれて沈み入る氣を猶息はり、

ヤレ此上は片時も娑婆に用はなし。サなせ討ぬ討てくれぬか。ヤイく介錯頼まぬ。

と腹の刀をずつばと抜き首筋に押あて、兩手をかけて『南無佛』と口に佛名兩眼に、母の顔

見る目を塞がずまじろがず、首に生顔残しながら落れば、人々一同に、『ワアわつ』と天に呼

はり地にさげぶ。さしもの母も前後にくれ、あへなき首を抱き上げ、

なふ五つの年の乳ばなれより、久しうて母に抱かれたチア。

と身にそへ歎き伏しければ、公時たまらず大聲上げ、

手も口も揃ふた武士の潔癖。エ、残念や。生置いて貞光未武綱公時に縋を加へ頼光の御

内の五天王と云はせいで悲しい。あつたら者を。

と身もなへく、我を忘れてすいり泣く。頼平君をはじめ姫君親子心なき供の若黨仲間ま

で、顔打上ぐる者もなく歎き詫るぞ至極なる。

内は歎きのまだ夜深きに外は明けゆく隙白く、時も移れば頼平君涙ながらに烏帽子を取り上げ、

日本武士の頭に置くべき侍烏帽子。今月今日纒が情かけ緒の諫めに依つて、頼平心を躑

へす段、公時具さに披露して御免の御詫相傳へば、その時具宰相夫婦を誘ひ伺候せん。

と渡す烏帽子を公時が首の用意に持せたる三寶に粧ひのせ、拳々服暫敬ひ捧げ『お暇申す

母禪尼』と、云へど答へずかこち聲。

母とは誰がと子の有る者こそ母とは云へ。今日より子としては有りもせぬ孤獨のばし。僻

事な宣ひそ。

と首を肌身にいだき伏す。姫君親子とふらひ涙、『江文の家の立つと皆此人の御恩ぞ』と云

ふより外は去らばとも、云で信夫のあら鷹も、翼しほるゝ公時が、立ち端に迷ふほのく

明け。袖の車や朝露の芝蘭の園に入る人は、とめねども袖に薫り有り。岷崙山の塊はみが

ぬ玉の光り有り。斯かる忠烈賢臣の出るも源氏の大將軍文武の徳の高きによると、歎き

をどいめ歸りけり。

箕田二郎苦諫、頼平悔悟。

第四所作

登場者

源頼平 將軍太郎其門
伊藤内侍
中藤少納言
渡邊岩藤
貞光妻らん菊

源頼平 江父宰相夫妻
坂田の金時
金時妻おしやなの前
末武妻木幡
其他

時日

第一光景
第二光景

主意 頼平、將軍太郎を救ひて然諾の意を叙し、及び小蝶怨魂
仇をなす。

第一光景 頼光館

古の七の賢き人も皆、竹をかざすは換なき御代を樂む心有り。坂田の公時太刀と烏帽子を
臺にもり、頼光の御前に跪き、

某討手を蒙りし頼平君に御首二ツ候。一ツの首は天下のかため國家の柱鐵の根繼となる

御首。又一ツは朝敵與黨の御首。則ち此御首討取たる證據に懸緒なしの烏帽子一頭。血
の付いたる抜刀は江文の宰相殿朝敵與黨の縁斷れたる證據。委き仔細申すもまだるく此
一通に公時が、快童丸の昔より手習きらひ、がさくさ流の口上書き、讀めかねるは御推
量に御らん願ひ奉つる。

と御前に差上る。

大將くりかへしく熟覽有り、

頼平は兄弟にひいて、公の御用にも立つべき器量と見届しに、思ひもよらぬ此度の罪科、
悔むに所なかりしに、いしくも仕たりな。人九赤人の名歌も、聞く人なければ歌人の
名顯はれず。伯牙が琴も鍾子期に有らざれば名を知る者なし。頼平が徳をかんと思を
もんじて天下の爲に命を捨てし箕田二郎繼が心ばせこそ可愛けれ。

と忝なくも御大將涙に噎ばせ給ひける。

爲成卿夫婦誘引のよし、それく是へ。

と御誑有る。

公時悦びお次に立ち、夫婦を伴ひ上座にすゝめ参らする。頼光御らんじ、

長袖の御身ながら武士に劣らぬ爲されかた。朝敵の縁断れたる證據委細に奏聞せば、二度御歸京御心やすかれ。

と宣へば、夫婦はあつと手を合せ、『只よき様に』と計りにて嬉しきも又涙なり。

遠侍に聲高く末武貞光將軍太郎を生捕りしと呼はり騒ぐ程こそあれ庭上にひつすゆる。御大將甚だ悦び給ひ、

彼奴音に聞く不敵のわつばよな。父將門關八州にはびこり自ら譜して平親王と號し、百官百寮を立てたる程の逆意だに、我朝神孫の神武にくだかれ、滅亡したる事聞き傳へてこりもなく、前代未聞の朝敵天のせめ通るゝ所なし。一先獄屋につなぐべし。

と宣ふ所に頼平夫婦さん切髪にてかけ出で、

御勘當御免の上は彼等ふぜいの朝敵、誅戮は我掌の内に有り。存ずる旨候へば彼奴が命は暫らく頼平に預け下さるべし。

と申し捨てつゝと寄り、

汝市原野にて詠歌の姫が一命を助けられ、一味徒黨を變せぬ證據。一たんの命を助け置く。今より後は敵と敵。戰場に鋒先をみがき汝が首を頼平が切先につらぬく迄慥に預ける。サア歸へれ。

といましめの繩引きちぎる。

良門つゝ立ち、

ホ、ッ見ごとく。天晴源氏の大將、契約を變せぬ本心感じ入る。重ねての參會は一戦の時。去らば。

と云つて立歸る。

頼光『誓し』とどいまめ給ひ、

儂れも鬼畜にあらねば善悪は知つらん。親の恥辱をすゝがん爲の逆心。しほらしやさしいで汝に賜せん。親將門が定紋繫馬の旗印陣幕、源家には無益の長物。汝が爲の守り神。得さするぞ。

と庭上に投げ給へば、追取て押いたゞき、

みます。

と餘儀なき詞に四人の女房一度にはつと頭をさげ、

ハアどふがななわ、

ハア何とがな。

と思案評定取りくなり。

公時が女房おしやなの前遠慮なくずつと出で、

仰せのごとく此度の御氣色、何とも心得がたきとて、頼光御夫婦頼信様のお氣遣い、鬼取ひしく我々が夫の武勇にも叶はぬは病論。寄り合ては頼にしは。女房仲間の評議には、どうでも是はお悋氣のかたまり。男の手くせ足くせも、私らが様ながらはりは噛み付きも仕かねず。又下々の夫婦かけ向ひが悋氣いさかひは、先敵きあふくらはしあふ、道具三ツ四ツ打われればさらりつと胸が晴れるげな。上々方はうはずんべり、お心ではかりくよくくく思ひの積り、それにお氣ばらしとはア、聞へたお療治。先づ私が存じより申して見ましょ。見すく心を引立つるは相撲く。先お座敷に四本柱、くくり枕を

ならべ土俵をつき、四人の眞裸で、二人づゝ西東へ立ちわかれて大關、腰元衆の内で關脇小結をえらみ、残りの女中皆前ずまふ肌物は男の通り純子縹珍の二重廻り。ア、去りながら、さがりを取つて引く時中にてたへのはり合なく、脇へずつと外れては氣の毒か。いつそそれも一景で有ふか。末武貞光のお内儀、何とおぼす。

と云ひければ、らん菊木幡顔打赤め、

チ、さんない一景も半景も、娘子共の時ならばこじほらしうもあれかし。持ふるした墨の肌へ、腰に廻した肌物脇へずつとはづれては、手負鳥見る様で凄然すまじかる。

と吹き出す。中に木幡は才覺者、

すべての病人晝はまざるゝかたも有り、とかく暮てのお慰みと思案致すに、毎年七月十六日、東山の大明神都では珍しからず。この築山にうつし秋知り顔の夕げしき、御らんに入れては何とばしあらん。

と云へば岩藤、

二人の御趣向残る所はなけれど、私が又思ふには、昔衣笠山に白布引きは、夏の雪を

御らんせし帝も有り。お庭の梢に小袖をいくらも打かけ、四季の草木菊女郎花の染めもやう、縫織紋の梅櫻、一度に咲ける風景、お氣も轉ずる道理。是は何とも局様。

チ、何れも一趣向。とかく書付を以て伺はん。

と人々伴ひ御寢所のお次の遣戸をそつと明くる屏風の中、夢うつゝなき内侍の聲、わつと甦れうめき身もだへ寤返りに、皆々立寄りやうくと抱きおこせば力なき、未央の柳よはくと御頭おもげの御息つぎ、女房達も諸共に打しほれてぞ見へにける。

岩藤いさめて、

常々細いお心に何んぞこはいお夢かな。必ずお氣にかけられな。神佛の夢想の外は皆おだ夢。莊子と云ふ唐土の博識さへ、夢の中に胡蝶と成りしと承はる。

と云ひもあへぬに内侍はつと色かはり、

胡蝶の夢とは心へぬ。扱は自ら夢の中に、まゝなとばし言ひしよな。耻かしよよ。

と計りにてそいろ涙の御顔ばせ。

ア、お氣よはい。胡蝶の夢とは詩歌にも数々。お心にかけらるゝは何ゆへ。總じて今度

の御女やみ心元なきとのみ。お心つゝまず仰せられ、お胸はるゝが即ちお療治お藥もまはる筈。御慰みの爲にとて何れも趣向の物ずき。此内お望み遊ばせ。

と御らんに入る目錄くりかへし熟視り、

賊に各々心つくし、かへすくも淺からず。取分け此書付に、衣笠山の花小袖、梢に四季の花の光り、共に床しき詠めならん。急いで用意。

と宣へば、承はつて女房達數の小袖を取り揃へ梢々にかけにける。

先初春のその色を、これ此枝へひらくと、まつさきかけて梅玉つばき。かゝれやかゝれ藤波も、こす山吹の裾もやう。柳すゝたけ柳につばめ。あざみたんぼ。若草をかけし枝ぶり。吉野の初瀬の山櫻も、爰にみかほの杜若。五色の糸の色々を、縫の牡丹に玉を取る。獅子の手まりに手まり躑躅も見よ紅粉がのこ。白しほりは卯の花やかた、松もひの木も杉も榎も、紅梅もみうらゝこん紫。うら吹きかへせばあさぎ櫻ひは櫻、うす櫻八重櫻しほがま櫻瀧櫻、一重櫻や小櫻のあまへて見ゆる姦櫻とも御らんせと、詞の花も姿の花も、春の山路秋の野邊目前の興とも云ひつべし。

いつに内侍の笑ひがほ、

斯う見た所は誠の花にかはらぬ。目のさめた物ずき、殊に昔の衆が、思ふことなふむさ
く／＼機嫌よければ、つれて心も氣もかるい。

と手をひかれて築山にかゝりし小袖』とれもく／＼しほらしい模様や』と、御手に觸れたる萩
きしやう、菊にむれどぶ小蝶のぬひち目にかければ、

ハ、ハ、こは。爰にもまた小蝶か。

どわつと一壁手足もふるひ御色かはり、がつばと轉び伏し給ふ。

人々おはて抱きかゝへ、お寐間にやすめ参らす。四人あきれ溜息ほつと、なかに岩藤
打うなづき。

合點したく、最前胡蝶の夢の咄しにもぞつと成されたち顔持、今又小蝶の縫紋にてお
目のまふは只でない。御病氣は小蝶が見入れ合點か昔の衆。それよ。

と一度に大層上げ、

につくい女め慮外ならみ、目に物見せん。

と立別れかけまはつても何をあてど。又集つてどふせうと手に手を組み合ひ頬づかへ。木
幡即座のくふうをめぐらし、

ナフ是々々、屈竟一の思案が有る。幸い今宵は掃火の大文字。もと此東山の大文字と云
ふとは、七月魂祭の聖靈の、冥途の道をしてらして送り歸す送り火。左も無ければ魂娑婆
に迷ひどいまるとして十六日の夕ぐれは京中加茂川筋に群集をなし、聖靈の送り火。これ
に付いても歸りや／＼と聲々に呼はる。夫になぞらへ、娑婆に迷ふ小蝶が妄執の魂を送
らば、妄念の雲晴れ立ち去つて内侍様の御本復疑がひも有るまじと思ふが、何れもなん
ど。

と言へば、一度に横手を丁ど、

できた／＼。サア時刻が来たぞはや急げ。

柴よつけ木よ松明と手々にさはぎ夕日影、はやくれかゝる遠寺の鐘、心もすめる聖靈の送
り火。

是につらても歸りや／＼／＼。

秋ならぬ秋こそきたれ、黄昏時のさびしげに、築山の影ほのめくはむらがる螢か、明星か。かげは三ツ四ツ松明の數も四人の女房達まけじ劣らぬ、山のこし、東西上下一どきに、くはく一てん籠より、追ひのぼりては又峰より、傳ひあつまり彼方の谷、此方のちさき一ツに寄れば、大もんじ赫奕たり。無明の闇をてらさんとの、高野大師の御ちかひ。方十丈の御筆畫今もありく有がたき。安養世界淨土寺村、爰にうつして彌陀來迎。たすかり給へ南無聖靈。南無阿彌陀佛。』と廻向して宿直所に立歸る。

銀河晴れ行く初更の天、消へかゝる文字の内より、一團の火焰烈々と空中にへんほんし、落ると思へば忽然と小蝶が姿あらはれたり。

うきたる雲の行衛をばく、風の心に任すらん。風の心もしら雪の、消へかへりてもあちたきつ、岩波高くせきかへす、懸幕のやみにくれ竹の、夜毎に通ふ築山の我身にもゆる片思ひ、人こそ知らぬ嫉ましやと、障子にあらくちとづる。

内侍夢さめ胸どいろき、

不思議や誰ぞ。

と問ひ給へば、

是は院の御所に仕へ申す命婦にて候。扱も内侍例ならざる由聞召し、唐の大和の妙藥を賜はり、みづから持て参りしなり。いたゞき疑ひ給ふなよ。

夜陰のおどづれ物すどく不審ながらも立出て、見るも恐ろし夢の小蝶。驚き玉ざり入ればおつかけ怒れる聲。あろかの人の有様や。惱みをかくるも我せこが來べき宵なりさ、がにの、蜘蛛のふるまひ豫てより我なす業とはしら糸の、來るや千筋の糸筋に五躰をからめ苦しめて、ひつ立てくくられ。遊んどすれど亂れ足の、はひまどはるゝ萬かつら、恨みつくむも漏れやすき、隔き竹のすぐならぬ、其身をくめの千度八千度、こちらは百度百千度、うきぬになが夜なき明す。なふ恐ろしやあそのたはれちりんきは、あのが心の闇の水くらし、澤の螢火送火に付て立去れ歸れかし。いやいかに云ふ共つきせぬ恨みの心のさび矢、怨念力のはり弓にみてや落さん連理のゑだ、噴毒邪見の斧鉞を打立てくしつてい。

伐木どうくどうく。枝も梢も打切り打をり打拂ひ、魔道に沈んで浮むせもなき我眷屬の、長き奴とせんものをと、又引立れば息もたへく引れ廻るぞいたはしき。君は嫁

入の花やかに、我は地獄の門出でに、氷の刃は劔の山、綾や錦のどのみ物、かへつて焦熱大焦熱の、炎に身をば焦すくるしみ。三々九度は二河白道。うつまく炎みなざる白波。庭の梢のさつ／＼。池の水音どう／＼。天地却つて廻り高天くだけて落ると見れば猛火と燃へ、電光げきして雷電すさまじかりける次第なり。

『すはヤ事ぞ』と四人の女房長刀かい込みとんで出で、内侍をいたはり寝所にいれ眼をくばり立たる所に、うしろにすつくど小蝶がかたち、一人六臂の變化を顯はし、

汝しらずや我そのかみ、南閻淨州にわたかまり、葛城山に年をふる土蜘蛛の精靈なり。大日本を押領し魔界になさんと、將軍太郎が心に加被しかひも情の道にうばはれ、屍斗かは泥土となんぬ。猶魂魄は五行造化の氣にとゞまる。一念只今思ひしれ。

どはつたと睨むをひるまぬ恐れぬ四人の女、

いかんぞ汝王地をぢかす冥罰神罰、身をほろぼせし前車にとりず、後車のさいごう生々はてなき惡毒虫、羂絆を切らん。

といふよりはやく四人が長刀すそをはらへば、飛びあがり、右手をきれば左手へひらき、

うしろをなげば前にたちまち、はやむと輕むと縦横無盡。

『やるな』のがすな『あまやうじ』もらうじ。』聲を合せて四人が中に追取りまけば、形はうせてさかんの猛火炎を燐々爆々たり。

南無三寶しんせしどあきれ立たる庭の面、花もこがる、紅梅の木の間いきよろりとけら／＼笑ひ。霞をふんでかゝるきは梅が香。おもきは惡業。たはむ枝々歩むともなく行くともなく、あれか是かと又かげうせて、爰よかしこと眼をくばればあれを見よ、御はしの元によつきと立て小手まねき、こなたへ戻れば雪かあられか雲間の月。四方八面前裁築山おふつまくつ、隠れつ見へつ、業通自在。長刀なげ捨て手取にせんとかけよれば、化生も六臂に追つまくつ、今癩腦の犬おふ物。眼の光りは羅計火星。圍に向つてつく息は、虹のかけはし長廊下、五歩のぼそどの十歩の樓、尋ねるかたも築山の、山は鐵城、水は清劍、しゆらのちまたにいざ來れど、四人を一度に引しめ／＼なぐればとまるふればしがらむ。ねぢおひへしおひ山をつんざく變化の勢ひ。陸地に舟こぐ四人が力。えいや、えいやとひく息つく息、惡風吹かけ砂をどばし、炎の煙のかけにかくれて姿は忽ち失せにけり。

四人の女も勇氣をくだき忙然と成つたる所に、御家督頼信朝臣平井の保昌相具しかけつけ給ひ、桃園重代膝丸の御太刀、内侍の枕の守りにたて、虚空に向つて大音上げ、怪は徳に勝ずとしる。たどへいか成る變化化生雨となり風となり、千萬に轉化して障礙をなすとも、天孫附屬の天子の威光、源氏の武功に加へ四かいに施さば、刃に血ぬらず戦はず他方萬里に追散さん。と雲間をにらんで立給ふ。

聲をひとしく山河草木動搖して五百機たてる蜘蛛の糸、重なる雲に夕立のしのを亂すにことならず。かなたこなたに立まふ内、御寝所の内震動鳴動是はとあはてかけよれば、膝丸とのれとさやをぬけ出で刃の電光猛火の稻妻、變化の眞向はつしとうてば、血煙ばつとみなざるたきつせ恐れて御殿を去よと見へし。今より又も來らじといふかと思へば忽に内侍の御氣色本復本望、人々悦びざめく聲、空には刃のひらめく光り、逝行く化生を追かけばつゝ、雲に登ればつゝいて分け入り、飛行自在の名劔寶劍、名も今の世に蜘蛛切丸と威徳をしたひ、血をしたひ變化の根を切り葉をからし、治る御代の民安樂、十萬貫を腰に付け、

千歳の鶴に乗り、雍州の都に樂しめる其樂みを樂むも、今此御代に生れぬ人は猶こそ樂しけれ。

小蝶の怨鬼頼信の妻伊豫の内侍を苦しむ。

第五所作 萬城山

登場者 將軍太郎良門 小蝶の童即ち土蜘蛛
出羽の冠者頼平 河内の守頼信
坂田の金時 平井の保昌
渡邊の綱 其他

時日? 注意 逆徒討平。

土も木も我大君の國なれば、いつくか鬼のやどりなる。劔の威徳に切拂ひし土蜘蛛の血をし
たひくるかづらき山、平井の保昌討手を蒙り、麓を取まく數百の軍兵震隠れにさへける。
例の氣ばやき坂田の公時。

變化流行の蜘蛛なりとも高が虫、太刀も刀も入るべきか、ふみつぶしてくれんず。
と敵へしちつて竹箒打かたげたる煤掃出立、不敵にも又ひやうげたる。跡に嘶く響の音諸

軍に先き立ち獨武者、もへぎにはひの甲冑弓箭、とりかい粟毛に一鞭あて歩ませしが、公時を遙に見騎打よせ大音上げ、

討手の大將保昌が目にとさへさるは變化の所爲か、君命の矢先きうけて見よ。

と弓弦していでうちつがふ、

ア、そさうするな保昌。變化でも蜘蛛でもない、コレおれぢや。朝霞に顔がみへぬか赤じや〜。公時じや。卒爾するな。

とうろたへる。保昌それとは知つたれ共、きやつが持病の先きがけ、しつけはこゝぞと頭を打ぶり、

イヤ〜くはぬ〜。變化の通力我が眼をくらまし、公時に化け近付きより引さき捨んとは愚々。よし賊の公時にもせよ、大將の下知を待はず軍令を背く拔がけ。射ちとして誤りならず。

と又引しほれば、

これ保昌、見しりごしにそりや胴慾。今からふつつり拔がけしよまい。偏意地も云ふま

い。まんがらに首も抜まい。其方の云と何んでも聞て。もふ勘忍してくれ。

とてんまを欺く公時が保昌にこなされあら氣もださぬ誤り顔。蜈蚣につばき、すつばんにたで、皆それ〜の敵藥有り。

保昌はいだる矢先をゆるめ、

危ふ候坂田殿。

と互にとつと大笑ひ、貞光末武綱諸共おくれはせに近付き、

是々兩人あれを見られよ。かづらき山の絶頂に、繫馬のはた陣幕、將軍太郎が出張の城廓。頼信頼平御馬を出されからめ手へ向ふたり。變化も敵も一日しごと。時刻よきぞ大手より攻よ〜。

と下知すれば、ほらを吹立て太鼓をひびかせどきの聲々攻登る。

名にあふ山は嶮難險阻岩に取付き行く先は、藤か葛か細引か引渡す蜘蛛の糸、大木枯木十重はたへ張たる網に月日ももらさず、あん〜くらき木の間より、あら恐ろしや土蜘蛛の眼は明鏡、八つの手足に生る毛は釘を植たるごとくにて、出入る息に火焰を吐き、顯れ出れば

わつと恐れ引かへす。顔に蜘蛛の糞身をかちむ糸にくるしむ軍兵共、八つの足に引寄せ、血を吸とられ死するも有り。網にかゝつて惱むも有り。誠にきたいの悪虫なり。

坂田の公時走りより、

ヤア執着深き小蝶が魂魄、兄良門が出張の城を守護するか。蜘蛛の糞の亂杭さかも木引破り、太郎めが首とらん。

と箒取のべしげみく、菓をなき拂ひ打拂へば、又顯れて毒氣を吐き、腹に袋の子持蜘蛛、

ヤア人民をさんがいし、喰肥たる女郎蜘蛛、紙にひねつて袂に入れん。おと、ひこい。

と蹴れて飛かればかたちは消へ、残るは袋ばかりなり。公時きつと見、

なりに似せて臍をまくと、扱もでつかい子袋。大佛殿のやひどのふた。

と蹴散せばさつとさけ、其色青蒼たる小蜘蛛共幾千萬の數をつくしはひ出る。簇々ともむらがり集ては區々單々とわかれちり、這かど見ればすつくと立ち、蜘蛛かど見れば小鬼の形ち真中におつ取こめ、こてに飛付き足にまどひ取すて拂へどむらがりよる。ふみのけ蹴とばしなき立れば、山陰くらき梢をつたひ、ものが身をやく蜘蛛の光りこ、にとぼしつかしこに

きへ、般の姐己が火を愛し、火山を盡すにことならず。

がにはり者ももてあつかひ、『三日風がふかねば日本國を張ふとくと、云ふも理ぎやうとんや夥し。一つ、殺すは手間づいやし。』と竹箒しやにかまへ、さらりくさらりく、こぼ陰岩陰撫よせくはき立る。蜘蛛の足音竹の音、扱もはかゆき面白やと松風につれさつとど、箒にかけてはき捨る、風に蜘蛛の子ちらしける。

公時がさらへるまに谷を隔て、渡邊の綱貞光末武からめ手へ攻登り、朝敵與力の惡黨共腕限り切つくし、將軍太郎を餘さじと大手の坂へ追來る。

先には公時待迎へ通るゝ方もなき所に、不思議や小蝶がありし形ち影のごとくに顯れて、良門につきそへ共、四人が眼にさへざらず。太郎は妹の神通力五たいに加る身は鐵壁。公時をされ網とされ末武貞光かかれやくと欺けば、四人目くばせよる所をこと共せずひつ掴み、かいつかみ右手へ投のけ左手へけちらし八方にらんで立たるは、詮方なふぞ見へたりける。

保昌まつとさき立て出羽の冠者頼平、河内守頼信公遙に聲かけ、

「ヤア、其のもの凡身ならず、小蝶が精魂土蜘蛛の通力加はると覺へたり。今に初めぬ此太刀の奇特を以て切りはらはん。」

とぬきはなし押いたしき、『源氏の氏神正八幡、哀憐應護を加へおはしませ』と良門めかけ投げ給へば、小蝶が形消へうせて眞の形蜘蛛切の不思議を見るも神慮のかど。得たりやぶと綱貞光將軍太郎を組とむれば、公時末武蜘蛛の背にまたがつて動かせず。頼平頼信走りよ、朝敵退治、土蜘蛛退治、あだも恨も切ほどく、御連枝一所に頼光頼信頼平の家宮祭へ國繁昌、つきせぬ源氏の御代永々萬々歳とぞ祝ひける。

將軍太郎及ひ妹小蝶の靈(實は土蜘蛛)殺さる。



(樓 欲 烏)

近松著作一斑 上卷

近松著作一斑 下卷

近松の近松たる所以は史戯曲作者たるの故にあらすして社會戯曲作者たるの故にあり

「近松著作一斑」下巻は詳に彼が社會戯曲を評釋したる者眞成の彼を知らんを欲する者は一讀せしして可ならんや

本書正誤

(個所)

十九頁第三行
三十五頁第五行
三十五頁第六行
四十九頁第十行

社會戲曲

第一第二所作に於ける

換へ、親族の
歌舞伎

(正)

(一字下ける)

第一所作に於ける

換へ、第二所作と共に親族の
歌舞伎

六十一頁第十二行

現實的

現在の

六十二頁第一行

個人想社會想

個人想と社會想

百三十三頁登場者中

肝煎老婆

肝煎老婆

三百八十七頁登場者主従關係中

碓氷貞光

白井貞光

同上

禪師

禪尼

三百八十九頁第十行

其母禪師

其母禪尼

四百八十頁第三行

沙婆

婆婆

明治二十八年九月廿七日印刷

明治二十八年九月三十日發行

(定價三十五錢)



著者 塚越芳太郎

東京市麻布區霞町二十二番地

發行者 垣田純朗

東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 高田乙三

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所 民友社

東京市京橋區日吉町四番地

民友社出版書籍目錄

青年叢書

全部十卷 每月一卷發兌

身高峰に起つ眼千里の概なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず、國民の資格を高くするの道果して如何、連勝國は大陸大洋の主人なり、一大故郷を造るの道果して如何、癒ゆべからざる鐵創を頌清に加へ、新興國として世界

第一卷 武遠
第二卷 本
第三卷 市

朝備教
美

育征術民

郵定 郵定 郵定 郵定
稅價 稅價 稅價 稅價
二十 二十 二十 二十
二 二 二 二
錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

第家第家第家第家第家第家第家第家第家
庭七庭六庭五庭四庭三庭二庭一庭
八卷七卷六卷五卷四卷三卷二卷一卷

簡家家小家玩夏家

具の庭
易政庭兒庭

料整衛養教遊家
和

理理生育育戲庭樂

郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定
三 稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價
二十二二十二二十二二十二二十二

錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

第 第 第
三 二 一
卷 卷 卷

娛簡海

樂易の

俱日
樂生本

部活人

郵定郵定郵定
稅價稅價稅價
二十二二十二

錢錢錢錢錢錢

社 會 叢 書

每月一卷出版
十一冊 讀切版
十二卷完結

現今日本の社會は頗る有望、多端、煩雜を極めり、上中下層社會、學問社會、商業社會、労働社會、技術社會、娛樂社會其他種々の社會の現狀、組織、生活の有様は如何、其狀況をして或は之を獎勵し或は之を評論し或は之を革新し以て興率、着實、精勵、有望なる社會となし、其社會に立つべき人物を養成し國家の基礎を形づくるとは編者の急務とする所にして社會の書は有益の、進歩的、平民的、實行的を主とし、空想浮薄の趣なからんことを期し、其文章文辭は及ぶより簡明平易を旨とし、断定を行はば決して空想浮薄の趣なからんことを期し、其文章文辭は及ぶも少年、青年、婦人、男子其他凡ての社會を通じて、新智識、新職業、新生活の案内又は其範圍相手を期す、其主義、目的、文章斯の如し、今や日本が世界に向つて大膨脹を開ける發端に於て此書を發行す其間大に理由なくんばあらざる也

第 第
四 五
卷 卷
職 業
「青年叢書」第六卷以下目次は如左
第六卷 學 第七卷
第九卷 實踐道德 第十卷 壯傳 遊記
第八卷 時 世
術論 郵定郵定 二
稅價稅價 二十二 二
錢錢錢錢

大支臺日日

清清清

軍軍軍

記記記

續後前

論論論

郵定郵定郵定郵定郵定

稅價稅價稅價稅價稅價

四十四四十二二十

五五五

錢錢錢錢錢錢錢錢

平平第平第平
號平號平第平第平
民民十民九民
叢叢叢叢叢叢
外書外書卷書卷書

哲白銀責

學人哲之貨

變種之過去
遷の現在未

史途來閣

郵定郵定郵定郵定

稅價稅價稅價稅價

二十二二十二二十

二二二二二二

錢錢錢錢錢錢錢錢

平平第平第平第平第平第平第平第平第平第平第
號平號平第平第平第平第平第平第平第平第平第平第
民民十民九民八民七民六民五民四民三民二民一民
叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢叢
外書外書卷書卷書卷書卷書卷書卷書卷書卷書卷書

世國教文現經

九世經界
之弊及
政遺其會
變大之

勢動府傳治義德法

郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定

稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價

二十二二十二二十二二十二二十二二十二

二二二二二二二二

錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

家第家第家第
庭十庭九庭
叢叢叢
外書卷書卷書

社婦家

交人庭

理一職

斑業財

郵定郵定郵定

稅價稅價稅價

二十二二十二二十

二二二二二二

錢錢錢錢錢錢

第十宮 第十高 第十北 第十塚 第十山 第十八 第十內 第十號

二文崎 四文木 五文村 六文越 七文路 八文卷 九文見 二文外

シ ュ 新 近 芳 エ 門 ゲ ナ 八

百 伊 太 太 太 彌 太 貢 著

ル 吉 作 郎 郎 郎 吉 井 著

ヅ 一 門 左 衛 石 門 ン テ ス

ソ ン ゴ 白 衛 門 ン テ ス

ソ ン ゴ 白 衛 門 ン テ ス

ソ ン ゴ 白 衛 門 ン テ ス

ソ ン ゴ 白 衛 門 ン テ ス

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定

稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價

四二 六三 四十 四十 四十 四十 四十

十 十 八 八 八 八 八

錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

第十山 第十竹 第十平

二文越 二文越 二文越 二文越 二文越 二文越

荻 瑪 與 力

彌 三 久 著

吉 郎 郎 著

生 著

ウ ラ

徂 ヌ イ

徂 一 ル

徂 一 ル

郵定 郵定 郵定

稅價 稅價 稅價

四十 四十 四十

八 八 八

錢錢 錢錢 錢錢

征 支 第 一 二 三

歐 洲 灣 語

通 譯 官 股 野 保 和 編 纂

深 井 英 五 合 著

勢 三

語 三

集 論 伐 談 談

集 論 伐 談 談

集 論 伐 談 談

集 論 伐 談 談

集 論 伐 談 談

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定

稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價

二六 四十 二 三 二 二 三

五 三

錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

湖處子宮崎八百吉著
 歸 乾 坤 一 布 衣 著
 最 暗 黑 之 東
 懷 富 猪 田 郎 著
 吉 富 健 次 郎 纂 譯
 グ 富 健 次 郎 纂 譯
 武 富 健 次 郎 纂 譯
 格 富 健 次 郎 纂 譯

松 下 武 雷

省 京 舊 陰 士 電
 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價
 四十二 四十二 四十二 四十二 四十二 四十二
 十 十 十 十 十 十
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

德國 德國 德國 德國 德國 德國
 書民 書民 書民 書民 書民 書民
 富 富 富 富 富 富
 第 三 國 國 第 天 文 靜 青 人
 猪 猪 猪 猪 猪 猪

二 一 一 一 一 一
 二 然 學 思 物
 郎 郎 郎 郎 郎
 著 著 著 著 著

民 民 小 小
 思 斷 餘 管
 餘 餘 教

說 說 錄 人 片 錄 育 見
 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價
 四十四 四十四 四十四 四十四 四十四 四十四
 五 五 十 五 五 五
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

國民之友	自第廿五號至第三十六號	社説	第四集	定價	十八錢
國民之友	自第九十五號至第一百十二號	十八冊合本	第三卷	定價	七十錢
國民之友	自第二百三十三號至第二百三十八號	六冊合本	第二卷	定價	七十錢
國民之友	自第二百三十一號至第二百五十二號	二十二冊合本	第一卷	定價	五十錢
家庭雜誌	自第二十一號至第三十號	十冊合本	第三卷	定價	五十錢

國民新聞

定 價 一 枚 金 三 十 五 錢
 一 月 前 金 一 圓 三 錢
 三 月 前 金 三 圓 三 錢
 市 外 郵 稅 一 月 金 十 三 錢

眼を世界の大局に注ぎ、國勢を列國の間に高むる、是れ膨脹的新日本國民の任務にあらずや。國民新聞は自ら此責任に任ず、彼れは日本を中心として世界を觀察し、世界を中心として日本を論ず。此故に彼れは已に藩閥黨派を眼中に置くも

のにおらず、彼れは日本國民を信下、日本國民の健全なる志氣を鼓舞し、振起し、膨脹せしめ、之を以て外に國交上に給與強の主義を貫徹し、我が日本國をして品格あり勢力ある位置を恒に世界の舞臺に有せしめんと欲す。國民新聞を讀んで眼を紙背に徹せしむるの士は蓋し吾人の實の虛を無空にあらざるを知らむ。

外交に強硬の主義を貫く、内自から養ふ所なる可からず。國民新聞の内政上に取る方針は物質上に富強強兵を講じ、精神上に國民的殉公殉民の教育を施し、國民の力を以て國勢を高め、國民の力に依りて國威を張るに在り。國民新聞は國民の力を信ず、唯夫れ深く之を信ず、故に眼中藩閥なし、復た黨派階級を見ず。

若し夫れ社會を描くの大膽筆直なる其野するの精選なる、其導きの職權に於て常に先に於て之を鞭下之を警め之を勵ます如き。

文學士に於て健全なる思想清新なる趣味を鼓吹し、實業上自由、勤勉を味方とし、廉潔、廉價を敬する如き。將た世の不正を見ては痛撃餘力を剩さず、正義を見れば陽謀陰謀及ぼざらんことを是れ懼る如き、是れ國民新聞の風とに特色として世に許さるべきこと、今嗚々を要せず。

新聞たるの智識と品格と良心とを有し、自備して自ら行ふ、我邦に於ける世界的新聞らしき新聞ありせば、唯一國民新聞と云ふ能はずとするも、彼れ其類なる一たるを信せんを欲す。進歩膨脹は彼れの特色なり、彼れは進歩膨脹を首唱し、而して彼れ自ら恒に進歩膨脹しつゝあり。

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 國民新聞社

國民之友

國民之友は既に雜誌界の巨人として認識せられたり、彼の「社説」は眼と手と共にとつて大勢を揣摩し、事に先つて事を論じ、靜かにしては人生の問題より、激しては時勢問題、社會問題の骨髄に衝き入る。彼の「奇書」は天下名士の特

考へ特に草したる卓論を集めたるもの、名家偉人の經營に成りたる名篇を集めたる『漢草』と双璧の觀をなす『史論』の痛快明透なる見識は以て『雜誌』の艶麗瀟灑なる題目筆力と對すべく、『批評』の精緻は『時事』の深醇に對すべく『當今之問題』あり『海外思潮』あり、『經濟時事』あり、時に『大勢一斑』を掲げて大勢の推移を論ず。

發行所

東京市京橋區日吉町四番地

民友社

家庭雜誌

毎月二定 價金五錢
回十日半々年(十二册)前金五十錢
廿五日一ヶ月年(廿四册)全一圓
發兌市外郵稅五厘宛

家庭雜誌は社會の地盤を改革し、和樂光明なる新家庭を作らしめんことを欲するものなり、其評論は平直、其觀察は警拔、史蹟あり古今東西烈女偉人を清秀なる筆で寫し、科學あり最も愉快なる方法を以て物質的の文明を脱き、文藝には高妙なる小説詩歌音樂繪畫批評詩話文話あり、家政には家事經濟育兒法衛生談養病術調理法社交一斑日用品物價裁縫細物婦人の職業案内家の取締奴婢の使ひ方及び衣食住に關する諸事あり、雜誌あり、時事一斑あり、寄書投書あり、普通雜誌外別に一種の生面を開けり。

發行所

東京市京橋區日吉町四番地

家庭雜誌社

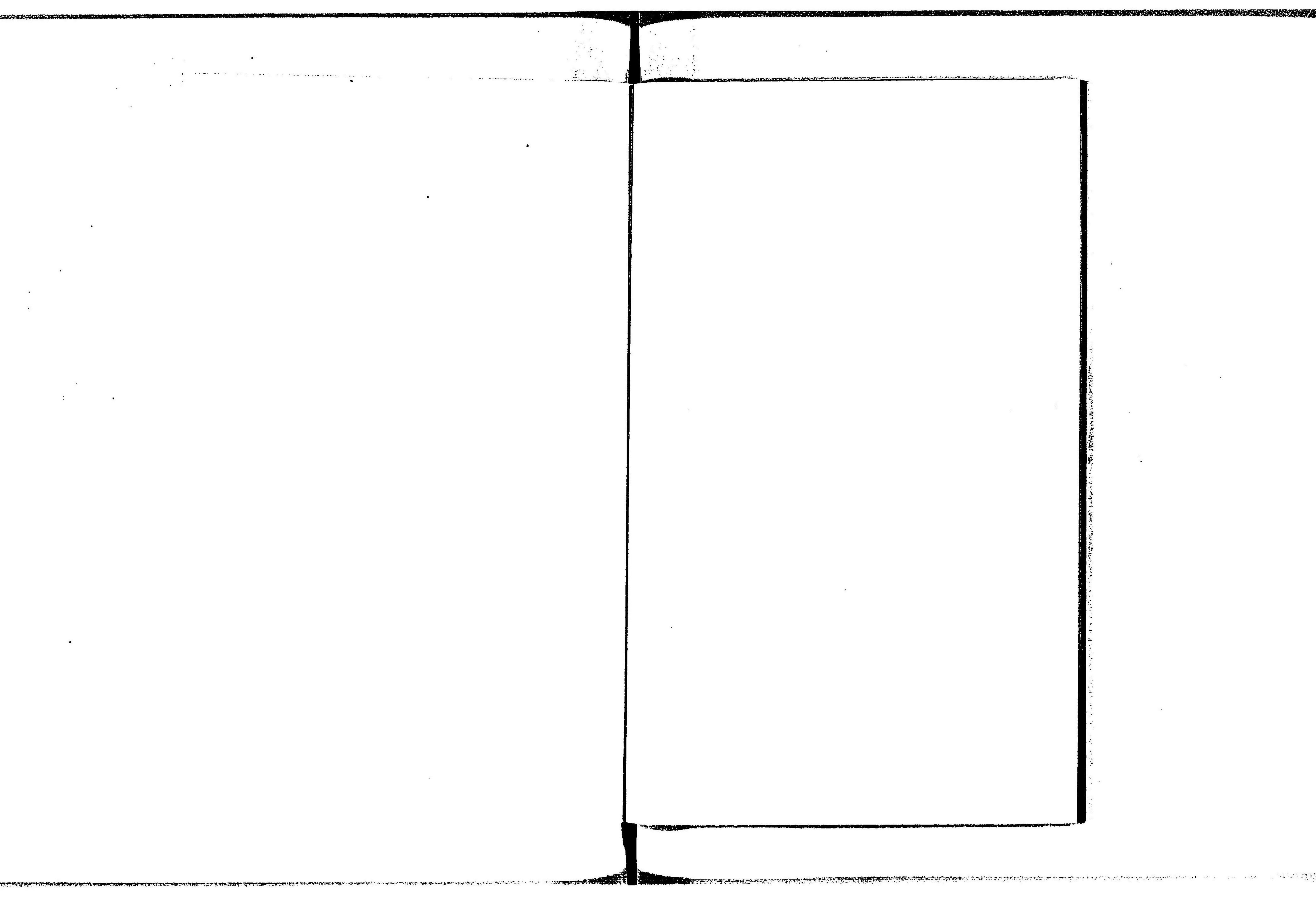
民友社發行書籍雜誌賣捌所

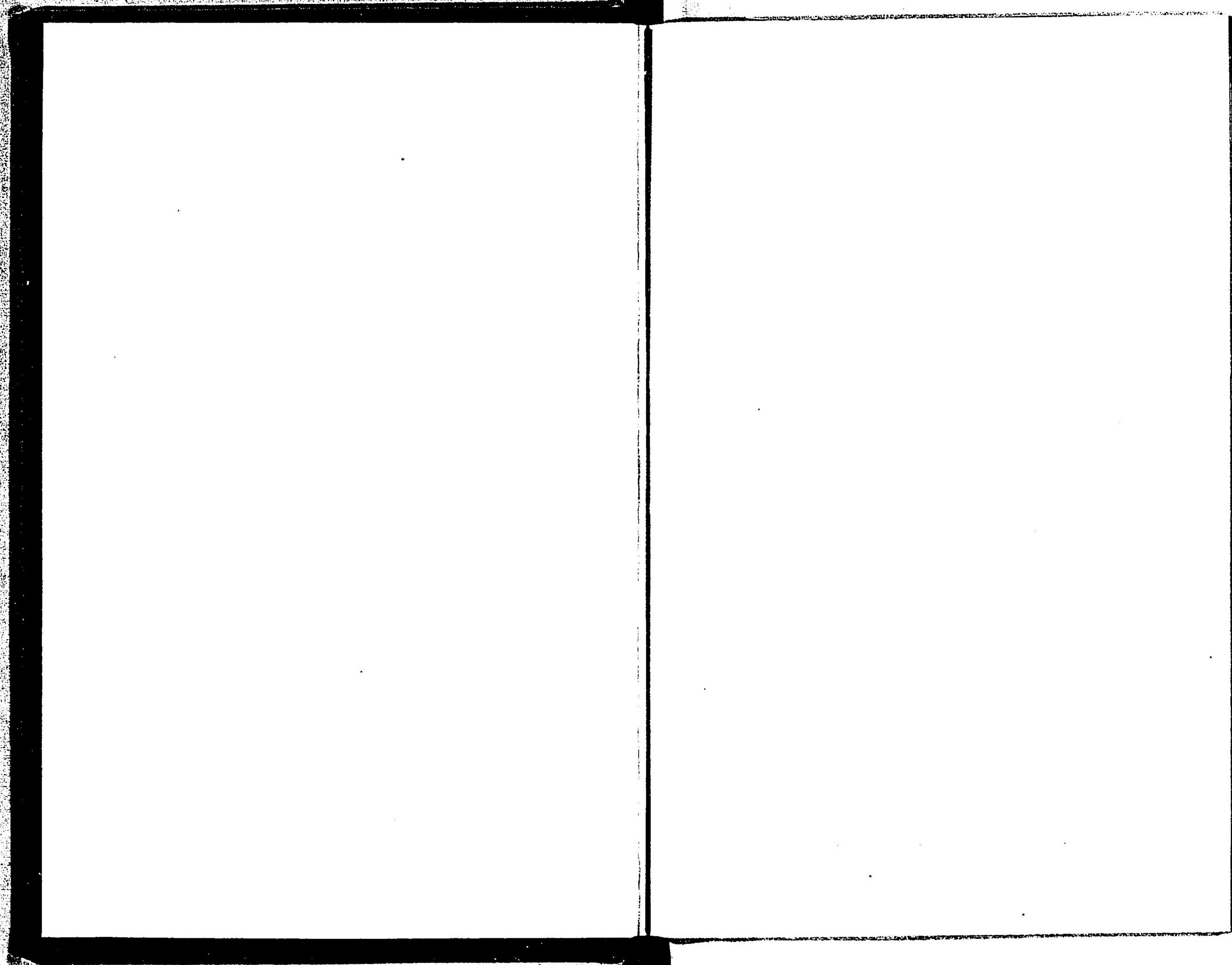
- | | | | |
|-------------|---------|-----------|-------|
| 東京市神田區裏神保町 | 上田屋 | 京都市寺町通り | 飯田信文堂 |
| 全 表神保町 | 東京堂 | 全 河原町 | 大黒屋 |
| 全 京橋區尾張町 | 東海堂 | 神戸市榮町 | 船井新聞鋪 |
| 全 錦屋町 | 北隆館 | 名古屋市本町 | 川瀬代助 |
| 全 神田表神保町 | 好明館 | 福岡市博多 | 積善館支店 |
| 全 京橋區出雲町 | 警醒社 | 全 | 森岡書店 |
| 全 芝區櫻田水郷町 | 文友館 | 熊本市新町 | 長崎次郎 |
| 全 神田南佐柄木町 | 田上書店 | 全 南新井町 | 好文堂 |
| 全 神田裏神保町 | 敬業社 | 全 古川町 | 網干屋 |
| 全 日本橋區新大坂町 | 鶴屋喜右衛門 | 熊本縣八代郡八代町 | 岩本理平 |
| 全 横濱市太田町四丁目 | 國民新聞社支局 | 全 | 時昌堂 |
| 全 大坂市備後町 | 吉岡書店 | 全 菊地郡限府町 | 中島常平 |
| 全 本町四丁目 | 岡島書店 | 長崎市酒屋町 | 安中三郎 |
| 全 備後町 | 岡島新聞鋪 | 仙臺市大町 | 木文書店 |
| 全 心齋橋通り | 中村雄 | 全 國分町 | 佐勘書店 |
| 全 京都市新町 | 便利堂 | 盛岡市中橋道 | 東北堂 |
| 全 佛光寺通り | 東枝律書房 | 全 泉原町 | 便益堂 |

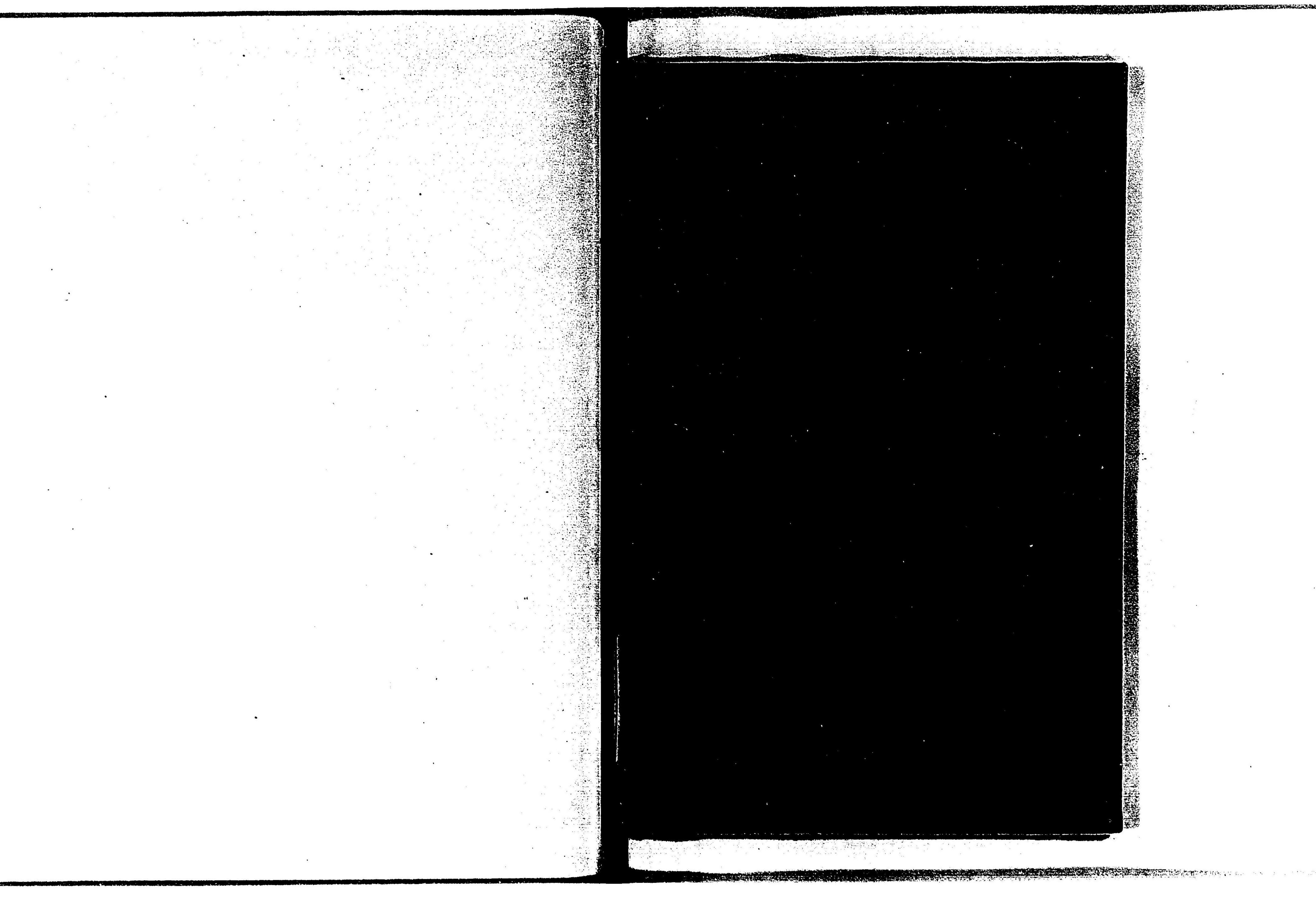
55/00

全	廣島市鹽屋町	積善館支店
全	草屋町	松村書六平店
越後水原町	西村六平	目黒十郎
全	長岡表四の町	高橋支店
全	高田町	室直支店
全	直江津町	高橋支店
全	新潟市四堀通り	原貞治
全	村松町	梅野屋佐吉
全	新發田町	津野仁太郎
全	小千谷	野口俊策
全	福島縣礪波町	博向堂
全	白川町	漸進堂
全	青森縣青森町	奥村書店
全	弘前市親方町	鎌田商書店
全	土手町	近松書店
全	北海道札幌南一條西三丁目	今泉書店
全	室蘭港札幌通り	最上谷治吉

全	札幌南一條西三丁目	十六
全	長野縣長野町	西澤喜太郎
全	松本町	水盛堂
全	岩村田町	文盛堂
全	小諸町	小廣文堂
全	鹿兒島縣鹿兒島市	吉田幸兵衛
全	全	金村光
全	全	谷村書
全	全	坂本新聞
全	川内	文友堂
全	茨城縣水海道町	新田書
全	富山市東四十物町	中平書
全	前橋市曲輪町	煥平堂
全	甲府市柳町	柳正堂
全	山梨縣勝沼仰町	正榮堂
全	世羅松江市	川崎清助
全	秋田市茶町	成見清兵衛
全	羽後湯澤大町	齋藤勘右衛門
全	羽後酒田上盛町	鈴木喜八
全	朝鮮仁川港	山岡書
全	伊豫宇和島	静凌堂







912.4

Ti238T2t

088305-000-7

912.4-Ti238T2t

近松著作一斑 上卷

塚越 芳太郎/著

M28

DBI-0143



